
バカと新学年と受験戦争

弥浦涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと新学年と受験戦争

【Nコード】

N5210X

【作者名】

弥浦涼

【あらすじ】

三年生になった明久は雄二や姫路とは別のクラスに。明久はFクラス代表になって、ムツツリー二が……………？離ればなれになった先に待ち受けるものとは？

問一（開幕）（前書き）

感想、要望、ご意見などお願いします。

問一（開幕）

振り分け試験当日の朝

「よし、明久。テスト前の小手調べだ！

『「三権分立」は「司法」と「立法」ともう一つは何で成り立つか？』」

「えーと……『行政』？」「おお、正解だ」

「あ、それじゃウチからも！では基礎問題！

『「 CH_3COOH 」とはなんでしょう？』」

「……………」

「アキ？」

「……………えっと、酢酸？」

「あ、正解！」

「凄いのう明久、去年は全然じゃったのに」

「へへーん、今年はFクラスにはなりたくないからね。じゃあ僕こつちだから！」

「アキっ！頑張ろうねっ！」

今日から僕は三年生。校門の辺りには桜が綺麗に咲いていた。

「吉井、遅刻だぞ」

玄関の前でドスのきいた声に呼び止められる。声のした方を見ると、そこには見慣れた去年の担任がいた。

「あ、鉄じ——じゃなくて、鉄人先生。おはようございます」

「もはや言い直そうともしないのか？」

「いえ、『鉄人』って呼び捨てにすると怒られるから先生って付け足したんですよ」

「どちらにせよ一番変えなきゃならない部分が変更されとらんぞ！」

「いやあ、すいません」

「まったくお前というヤツは……ほれ、受けとれ」

鉄人が箱から封筒を取りだし、僕に差し出してくる。宛名の欄には『吉井明久』と、大きく僕の名前が書いてあった。

「あれ、今年もこの面倒なやり方なんですか？」

まったく、あの妖怪ババアももつと効率よく出来ないのかな？

「いや、今年は体育館前に全員分貼り出してある。ごった返さないように個人に渡しているだけだ」

「ふーん、なるほど」

適当な相槌を打ちながら封に手をかける。去年はFクラスだったけど、雄二や姫路さんと勉強したりして大分学力が上がった今ならEクラスかDクラスを狙えるんじゃないだろうか。

「吉井、今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

封を開ける手を一旦止めて、鉄人の話に耳を傾ける。

「お前は去年の今頃と比べても、かなり成長したと思う」

「へ？」

あの鉄人が僕を評価するなんて、一体何があっただろう。

「学力もそうだが、人間的に大きく成長した。去年の今頃もお前は遅刻をしたが、あのときは俺の話なんか聞かずに、封筒を開けることに気がいつていた。それを今は話を聞くために手を休めている。これは大きな成長だ」

日頃叱られているだけに、こういうのはなんだか齒がゆくなってしまう。

「お前は振り分け試験でも、その成長に見合うだけの結果を残した。俺は誇らしく思う」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

封の上の部分を破いて紙を取り出した。

「喜べ吉井。お前はもうバカなんかじゃない」

折り畳まれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。

『吉井明久……Fクラス』

「お前は——……」

こうして僕の最低クラス生活（第二部）が幕を開けた。

問二（無事）

「あんなに頑張ったのに、どうしてまたFクラスなんだろう……？」

未だに納得のいつていない僕は、ぶつくさ言いながら三年生の階へ上がっていった。

暇潰しがてらに去年同様Aクラスを覗いてみる。

「では、クラス代表の霧島さん。挨拶をお願いします」

「……はい、坂も……霧島翔子です。よろしくお願いします」

一人一人自己紹介しているようで、やはり今年も霧島さんが代表みたいだ。今年でやっと雄二が十八歳になるからか、結婚願望が最近増ってきている気がする。

あいつは早く結婚して大人しくなってくれると助かるんだけどなあ。

「次の方、お願いします」「はい、木下優子です。よろしくお願いします」

秀吉のお姉さんの優子さん。去年はあまり接点がなかったつけ。同性愛者とか、シヨタコンとかいろいろ噂があつて大変だったみたいだけど、順当にAクラスに入つたみたい。

「工藤愛子です。得意科目は保健体育の実技です、よろしく」

相変わらず性に奔放な工藤さん。あんなことを去年のFクラスで言ったら須川君あたりが発狂してしまうけど、Aクラスならそんな

ことはない。

今年もムツツリー二が暴走したら工藤さんに助けてもらおうかな？

「では、次の人、お願いします」

流れ作業のように高橋先生が自己紹介を促す。そういえば、あの先生も引き続きAクラスの担任らしい。去年の合宿では相当痛い目に合わされたからよく覚えている。

「はい」

あつ……この声は……

「姫路瑞希です。去年は体調不良でFクラスでしたが、今年はちゃんと振り分け試験を受けられました。学年次席の名に恥じぬよう、頑張ります。よろしくお願いします」

そう言つてペコリとお辞儀をする姫路さん。無事に相応しいクラスで勉強出来るみたいだ。……ちよつと寂しいけど、仕方ない。

そのあとに四十人くらい自己紹介をしたところで高橋先生がボソリと言った。

「……えー、大体自己紹介は終わりましたね。今日は一人欠席ですので、その方には後日自己紹介をしていただきます。ではホームルームを終わります」

ん？ 一人欠席？ そう言えば雄二や久保君の姿が見えない。どちらかがAクラスから漏れたのだろうか。

っと、こうしてはいられない。僕も自分のクラスへ向かわないと。美波や秀吉たちと一緒にかな？

問三（既視）

三年F組と書かれたプレートのある教室の前で僕はかなり躊躇していた。

去年はクラスに入るや否や、バカ雄二にウジ虫扱いされたっけ。でも今年は違う。雄二はAクラスレベルの学力を身に付けたし、寂しいけど姫路さんはAクラスに入れたから、メンバーも随分変わっているだろう。

よし、大丈夫。何も心配はいらない。そう思って、僕は勢いよくドアを開けた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

デジャヴっ！ 一年たってもなんの変化もないのかよっ！？

「聞こえんのか？」

それにしてもなんて物言いだろう。いくら教師といえ礼を失しているにも程がある。

僕はその男を見た。

その背は高く、肩幅も常人の二倍はあろうかと思うほど広い。髪は短髪で、浅黒い肌をしたいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

「……鉄人先生、今年もですか」

彼は、僕の担任、鉄人（西村宗一）だ。

「ああ、俺も長年教師をしているが、三年間面倒を見ることはなかなかないぞ」「っていうか、つい数分前に玄関にいましたよね？
どうして普通に教室に来れるんですか？」

「貴様のようにフラフラと寄り道をしていないだけだ」

ふむ、一理ある。

「さつさと座れ、これから自己紹介を始めるんだ」

鉄人に言われ、渋々とそこの卓袱台に着いた。この卓袱台ともまた一年間付き合うのか……。

「よし、これから自己紹介を始める。その前に、設備に不備があれば申し出てくれ」

設備と言っても去年と同様卓袱台に座布団に畳。慣れているから別に気にならないけど、一応申し出てみる。

「先生、僕の座布団に綿がほとんど入ってないです」「耐えろ」

ふむ。

「卓袱台の足が折れてます」
「耐えろ」

じゃあ。

「先生、窓が」
「耐えろ」

それなら。

「先生」

「耐えるんだ」

「根性論以外の解決法はないんですかっ!？」

福原先生のほうがまだ親切だった気がする。

「では自己紹介を始める。廊下側の奴からやってくれ」

ああ……この先どうなるのかなあ……。

問四（面子）

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。よろしく頼むぞい」

おつ。秀吉じゃないか。相変わらずかわいい顔して爺言葉でしゃべるギャップがたまらないつ。そういえば、結局三年間同じクラスだ。

去年は夏休みとか色んなところに遊びに行つて、仲良く出来たつけ。不純異性交遊を許さない姉さんも、なぜか秀吉だけは認めてくれる。そこが『秀吉』なんだろうなあ……。

「——です。日本に来て三年目ですので、だいぶ日本語に慣れました」

おつ。また女子だ。今年はFクラスの女子が多いのかな？

「趣味は鈍感なアキをいじめることです」

誰だっ！？ 恐ろしくかつピンポイントな趣味を持つ奴は！

「はろはろー」

「み、美波」

「アキ、今年もよろしくね」

笑顔でそう言う美波。

「ちょっと美波！ 僕が鈍感だなんて失礼じゃない？ それだとまるで僕が告白に気づかないニブイ奴みたいじゃないかっ！」

「「「……」」」

なんだろう。クラス中から『やっぱりこいつバカだ』みたいな視線を感じる気がする。

「……アキ」

「な、何？」

「血液型は何型？」

輸血を想定した台詞に聞こえるのは気のせいだろうか。

「お姉さまっ、こんなブタ野郎の血液型より美春の血液型を聞いてくださいっ。最近美春は血液型占いに目覚めたのですっ」

あれ？この声は……

「清水さん？ 君もFクラスなの？」

彼女は清水美春さん。胸の小さいスレンダーな女の子が好きなちよつと変わっている子なんだけど……。 たしか去年はDクラスだった気がする。ちよつと不自然だ。

「どうして急にFクラスにまで下がったのさ？」

「ブタ野郎に言われる筋合いはありませんっ。美春はお姉さまと一緒に暮らすために日々努力を積み重ねているのです！」

なぜだろう。答えになっていない気がする。

「ウチと同じくらいの点数を取るために手を抜いたみたいよ。まったく」

美波の補足説明グッジョブ。

「まあ、好きな人と一緒に居たいって気持ちはわからなくもないよね、秀吉」

「……………返事に困る。あまり感心出来ぬことなのじゃが……………」

心なしが秀吉の顔がほんのり赤い。

その後もしばらく須川君とか福村君とかお馴染みのメンバーの自己紹介が続き、いい加減眠くなった頃。

ガラッ

「ん？」

不意にドアが開いて、制服を着た生徒が息を切らして入ってきた。

「あの、遅れて、すいま、せん……………」
『えっ？』

誰からと言うわけでもなく、教室の全体から驚いたような声が上がった。そりゃそうだ。普通はびっくりするだろう。

「ちょうどよかった。今自己紹介をしているから、そこでいいからしてくれ」

平然としている鉄人がその生徒に言い放った。

「は、はい！ 久保利光と言います。よろしくお願いします……………」

問五（手拔）

「申し訳ないです。少し用事があって、遅刻してしまいました」

「そ、そんなことよりど、どうして久保君がFクラスなのさ!？」

僕は思わず声に出して叫んだ。だって叫ばずにはいられない。彼は腕輪持ちでないとはいえ、姫路さんに次ぐ実力をもっている成績優秀者なのだから。

「まさか清水さんと一緒に、好きな人と一緒にクラスになりたくて手を抜いたんじゃない……?」

「明久。お主、それは墓穴を掘っているようなものじゃぞ」

墓穴？ 別に久保君が僕と一緒にクラスになりたいわけじゃあるまいし。

「吉井君、僕が手を抜いたのは事実だよ」

「本当なの久保君？」

「ああ、それは姫路さんの成績が原因なんだ」

久保君が手を抜いてまでFクラスに来る原因が姫路さん？ どういうことなんだろう。

「なるほどの」

「なるほどね」

「なるほどな」

秀吉、美波、ついでに鉄人。なんで君らはそんなに勘がいいんだ

い？ 頼むから僕が気づくまで黙っていてほしいよ……。

「つまりこういったことかの？ 『去年まで久保と同じくらいだった姫路の成績が短期間で飛躍的に上がった原因がFクラスにある』と考えたわけじゃな」

「その通りだよ。Aクラスのあの設備は整いすぎていて勉強どころではないし、上の設備を目指すモチベーションも無いしね。勉強するにはFクラスのほうが向いていると考えたのさ」

なんだろう、やっぱり久保君って……

「ねえ久保君」

「なんだい吉井君？」

「君と僕の考えは全く違うみたいだね」

久保君は勉強の為にわざわざFクラスにまで落ちたのだろうが、僕は良い設備を狙うために勉強している。ちよつと価値観みたいなものが違うんだろう。

「明久、久保の足が生まれたての小鹿のようにガクガク震えとるぞ」

「え？ 久保君、体調悪いの？」

「そうではないのじゃが……」

教室に入ってきたとき急いでいたし、走って疲れたのだろう。どちらにせよ休ませなきゃ。

「先生、久保君を保健室に連れて行ったほうが良いんじゃないですか？」

「それもそうだな。じゃあ清水、連れていけ」

「はい、わかりました」

あれ？ 男性嫌いの清水さんが久保君を連れていくことに不快を示さないなんて意外だな。

「ささっ、行きますわよ」「……………（ガクガク）」

なんだか新鮮な光景だなあ。ひょっとしたら、今年はまともな生活を送れるかも知れない。

『貴方が一緒とはラッキーですわ』

『これは僕らの目的を果たすために好都合だ』

「秀吉、男女の会話ってほのぼのするね」

「お主と島田はほのぼのしていたら取り返しのつかないことになりそうじゃ……………」

時々秀吉はよくわからないことを言い出すなあ。

問六（就任）

その後淡々と残りの自己紹介が進んでいく。

結局、雄二はFクラスじゃないみたいだ。久保君がFクラスってことは、その代わりに雄二がAクラスになったんだらう。

「最後だ吉井。前に出る」

鉄人が顎で僕を誘導した。やれやれ……僕の番か。ちゃちゃつとやつちやおう。

「一発かまして来るのじゃ明久」

「頑張りなさいよ！」

女子二人の声援を受けながら、僕は教壇に立った。

「えっと、吉井明久です。ほとんど顔見知りなんで説明することはないけど、一年間よろしくお願いします」

一年の最初の挨拶としては無難な方だろう。去年みたく無駄に煽っても意味はないし。

「「「……………で？」「」」

クラスから返ってきた返事はそんなものだった。

「いや……『で？』って言われても、なんにも言うことはないし……」

「それなりの言葉があるじゃろう」

「なんていうかこう……派手に行こうぜ、みたいな」

ひょっとして、『観察処分者』だからなにか変わった挨拶がある
と思っただのかな？ もしくは『ダーリン』のくだりをもう一度や
りたいとか？

「ひょっとして、アキ……気づいてないの？」
「はい？」

気づいてないって、何がだろう？ なにか特別なイベントでもあ
ったっけ？

「島田、それはあり得るぞい。何せあの明久じゃからの」

なんだろう、秀吉の台詞に悪意を感じる気がする。

「明久。お主、体育館前のクラス掲示は見たかの？」 「ああ、それ
なら遅刻ギリギリだったから見てないよ」

でもクラスは結局鉄人から封筒を貰ってわかったから問題なかつ
ただけだね。

「それなら貰った封筒をよく見てみるのじゃ」
「封筒？」

確か開けたあとポケットに突っ込んだ記憶が……あ、あった。

「うん、あったよ？」
「名前の隣になにか書いておらぬか？」

もう一度まじまじとその紙切れを眺めてみる。

『吉井明久……Fクラス』

「自分のクラスの横に印があるけど？」

これがなんだと言うのだろうか？ 別にたいしたことじゃないと思うんだけど。

「おい吉井、今朝紙を渡したあと俺が言ったことを聞いてなかったのか？」

鉄人が急に横槍を入れてきた。

「大方、またFクラスだと知った途端に意識がフェードアウトして聞こえてなかったのじゃろう」

「まあ、アキラしいっちゃアキラしいわね……」

むう。全く要領が掴めないじゃないか。

「結局なんなのさ？ 僕をバカ扱いするのは後にして、早く説明してよ！」

「吉井。もう一度教えてやる。その印はな——」

鉄人はそこで一言区切ると、よく通る声で教室中に響くように言った。

「——クラス代表の証だ」

問七（急変）

「え？」

「正直、去年学年最下位だった貴様が、Fクラスの代表になれるまで成績を上げるとは思っていなかったぞ」

「ワシも掲示で知って驚いたのじゃ」

「ウチも信じられなかったわ。でもアキの頑張りを見てきたから、すぐに理解できた。おめでとう、アキ」『そうだと吉井！』

『今年一年よろしくな！』『頑張れ代表！』

皆の声援が教室の中で大合唱となる。『観察処分者』という肩書きを聞いたときの皆の反応は、こんなに温かいものじゃなかった。もつと冷たくて、ひどい扱いで、バカにされてきた。それが今、皆が僕のことを、代表として認めて、信頼してくれようとしている。そうか……そうか……

「ふざけやがって雄二のバカ野郎があつ！！」

「「ええっ！？」」「」

「アンタは一体どういう思考回路してるのよ！？」

皆が何か言ってるが、そんなことは関係ない。問題はそう。他に
ある。

「……あの雄二がこの設備を使わずにいる、ということだ」

「アンタは人の幸せを奪うことしか考えられないの！？」

『そうだと吉井！』

『見損なつたぞ吉井！』

どうやらこれはクラス全体から反発を受けている状況のようだ。

「じゃあ……雄二はここよりいい設備で過ごした上に、あと数カ月で結婚するんだ」

『『『許すまじ坂本』』』

新年度FFF団初業務。

『坂本雄二を捕縛してこい。怪我を負わせても構わん』

『『はっ、須川会長』』

『Let's GO!!』

『『『イヤッハア!!』』』

「待たんか貴様らっ!! 授業中だ!!」

鉄人がFFF団を止めに行った。さすがの鉄人でも凶戦士化したFFF団を全員止めるには時間がかかる。

「さてと、今の内体育館に行こうかな」

「お主悪知恵は働くのじやのう」

ふっ。悪いけどその程度じゃもう堪えないのさ。

「……ねえアキ」

「な、なに？」

「アキは気にならないの？」

「へ？」

美波が言ってるのはなんのことだろう？

「その……いつもより早起きして、誰と一緒にのクラスか確かめるとか……アキは、無いの？」

美波の目は真剣だ。おそらく、美波は振り分け試験の後、友達と離れるのが怖かったのだろう。寂しくないなんて言ってるけど、ほんとはどこか寂しいんじゃないか。

「うーん。僕は『早く知りたい』とかは無いね。誰と一緒にのクラスかは入るまでの楽しみにしたいし」

「じゃあ……」

「うん、例えば美波や秀吉たちと別のクラスになっても僕は二人を特別扱いしないからね。離れてもずっと一緒に居たいし」

まあ、雄二が含まれていないのはお決まりだ。

「……う、うるひゃいわよバカ！」

そう言つと、美波はどこかへ走ってしまった。

「明久。お主、そこは全く成長しないの」

秀吉が呆れたように首を横に振った。

ガラッ

「じゃまするぞ——つてお前ら以外誰もいないのか」

窓から誰かが入ってきた気配がした。

「じゃあ、僕は体育館にいくかな。代表として各クラスの布陣も確

認したいし」「ワシもお供するのじゃ」「俺はここに隠れてるからな」

そうだ、念のため筆記用具を持っていこう。

「必要なのはこれかな?」「明久、何故コンパスが必要なのじゃ?」「明久、翔子が来たら『知らない』って言うてくれ」「うん、わかったよ」

とりあえず相手に見られないようにコンパスを構えて――

「死に腐れや雄二いつ!!」

僕は悪友に向かって凶器を振りかざした。

問八（事実）

「おおつとなんだ！？ いきなり明久が狂戦士モードになったぞ！」
「黙れ反逆者！ 一人のうのと快適生活を送りやがって！ 僕の苦しみを嘲笑いに來たのか外道め！」

コイツだけは…… コイツだけは生かして返さん！

「おい秀吉、なんで明久は理性が吹き飛んでやがるんだ？」

「……お主がFクラスの設備を使わずにすることが気に食わぬらしい」

「……そりやなんとコイツらしいな」

コイツらしいってどういう意味！？ 僕だってもうただのバカじゃないのに！

「ところで明久。お前、Fクラスの代表になったそうじゃねえか。また難儀なこつて」

「僕だつてなりたくてなった訳じゃないよ！ 振り分け試験だつて世界史と日本史は調子よかったし、事前の小手調べでも間違わなかったんだからEクラスには入れたはずなのに！」

確かその直前にやった模擬試験では、合計で1200点くらいだった。これはEクラスの上位レベルの成績だから、Fクラス脱出は確実だと思ったのに……。

「まったく……代表になってもバカは相変わらずなんだな」
「なんだと雄二！ もう一回言ってみろ！」

「相変わらずバカだな」

「……（シクシク）」

「言われて泣くならリクエストしなければよいじゃろっに」

誰だってバカって言われたら傷付くじゃないかあ……。

「あんな明久。俺がバカだと言ったのは『お前だけ成績が上がった訳じゃない』って意味だ」

「……へ？」

「つまり、『学園全体の成績が上がり、Eクラスに入るボーダーラインが上がった』ってことじゃ」

「なるほど」

この僕でさえ去年から400点も伸ばせたんだから、他の皆も数百点の成績向上があるということだ。

「だから僕はFクラスなのか……」

「気にするでない。それに、もし明久があと何点が取ってEクラスに行ってしまったら、ワシや島田と一緒にクラスではなかったのじやぞ？」

確かに、秀吉の言う通りだ。もしEクラス入りしたら知らない人だらけだろうし、何より僕を嫌っている中林さんと一緒になってしまいかもしれない。

「うん。やっぱり美少女二人と離れるのは寂しいね」「だからワシは男じゃ！」

やだなあ秀吉。もう二年も一緒なんだから、君が美少女だってことはまるわかりだよ？

「そういえば、雄二はAクラスに入れたんでしょ？
霧島さんとは仲良く出来てる？」

高橋先生が言ってた『欠席』っていうのは、きっと雄二が霧島さんから逃げて教室に居なかったからだろう。

「……何言ってるんだ明久？」

「へっ？」

雄二が額に手を当てて溜め息をついた。

「俺はBクラス代表だ」

問九（解明）（前書き）

アクセス7000突破&PV1500突破致しました。

ただ先に言っておきます。

新三年生のクラス分け。明久がギリギリ代表になったり姫路さんがAクラス入りできたり……全ては作者が原作の設定から考えられる範囲のものです。また、作品を面白くするために多少無理を入れています（久保君とか）。

それが今回全て明らかになるのですが、

『今回のラストは派手に行きすぎました！反感買いかもしれません！！（汗）』

是非『それ』について感想お願いいたします。

問九（解明）

「え！？」

「何だ明久、知らなかったのか？」

だって雄二がBクラスだなんて意外過ぎるでしょ！ てつきり余裕でAクラスだと思ってたのに……。

「いや、お前のことだから遅刻して掲示を見損なっただって所だろうな」

「なんでわかるのさ！？」

「それだけお主は単純なのじゃ」

「それはそう何だが、正直、俺も驚いた。てつきりAクラスだと思っただが、まさかBクラスとはなあ。いやあ、意外だったよ」

「本音は？」

「翔子と同じクラスで学校生活をしなくて済んで良かった」

よし、後で霧島さんにそれとなく告げ口しよう。

「お主、霧島に密告しようとしてるじゃろ」

「なんでわかるの！？」

「それだけ分かりやすいんだよ。ったく、今からそんなに代表が務まるのか？」

「余計なお世話だ」

とは言っても、やはり不安はある。去年は雄二や姫路さんがいてくれたから試召戦争もなんとか勝てたけど、いくらなんでも僕に代表が務まるとは思えない。

「そうか……。うん、明久なら俺の助けが無くても大丈夫だろう」
「え？」

一体どういう風の吹き回しだろう？ コイツが僕を褒めるなんて滅多に無いのに。

「せっかく明久の為にクラス表を持ってきたんだが、必要無いよな」
「申し訳有りませぬ雄二さま」

悪友に対して土下座？ そんなの全然気にしないねっ。

「だからそこがワンパターンじゃと言うのに……」
「いちいち言わないでよ秀吉っ！」

雄二が再び溜め息をついた。

「仕方ねえ明久、今回だけだぞ？」
「うんっ」

僕の返事を聞くや否や、雄二はズボンのポケットからA3の用紙を取り出した。

「正直、今回の振り分け試験は大波乱だったな」
「うむ、成績を伸ばした者とわざと落とした者が意外じゃったの」
「ねえねえ雄二。いいから早く見せてよ？」

僕の発言を遮るように、雄二が『待て』と手を挙げた。

「俺たちはもう敵同士なんだ。だからお前が知ってる奴等でクラスが変わった奴だけ教えてやる」

雄二の言い方は冷酷だった。でもコイツは正しいことを言っている。

雄二は別の紙を取りだし、それに書いていった。

『久保利光・F』

「明久」

「ん？」

「憐れだな……」

「あはは、何言ってるのさ雄二。久保君は至極真面目で清純な人だよ？ ……ねえ秀吉。なんでそんな目で僕を見るの？」

「……不憫じゃ」

『根本恭二・A』

「あ、根本君が上がったんだね」

「代わりに俺が代表だな」

『小山友香・B』

「畜生つ雄二め羨まし……くない」

「だろ？」

『清水美春・F』

「明久」

「ん？」

「憐れだな……」

「ああ……」

（同じ性癖でもこれだけは反応が違うのじゃな）

『姫路瑞希・A』

「まあこれで、明久の願いも叶ったってもんだな」

「なっ……違ったりや雄二！」

「ふふっ、噛んでおるぞ明久っ？」

「もうっ！ 雄二、次！」 「はいよ」

『坂本雄二・B・代表』

「雄二、次」

「俺はどうでもいいってのか!？」

「いや雄二。これはさっき言ったから明久も間違っではおらぬぞ」

「ちっ……、まあいい。次でラストだ」

最後？ あと僕の知り合いと言ったら――

『ムツリーニ
土屋康太・C・代表』

……………え？

問九（解明）（後書き）

ム「……………今までセリフ無い」

作「感想お願いします！」

問十（経験）

「ムツツリー二がCクラス代表おおっ！？」

何だよそれ！？ 印刷ミスとか情報操作の類いじゃないの？

「驚くのも無理はないぞ明久。始めは俺たちも信じられなかったんだ」

「西村教諭に確認したのじゃが、コンピューターのミスとかではないそうじゃ」

保健体育しか得意科目じゃないあのムツツリー二がCクラス——
——いや、もう少しでBクラスに入れるくらいの成績を身に付けていたなんて……。

「雄二、そんなの……」

「ああ。恐らく……」

「「カンニングに決まっている」」

「なぜ素直に本人の実力と考えられんのじゃ！？」

素直？ なにそれ食えるの？

「いきなりAクラスだと不自然だからCクラスにセーブしたんだろ
うね」

「大方、カメラが何かで隣のやつの解答を見たんだろ」

まったくムツツリー二だったら。いつからそんなに卑怯な手段をと

るようになっただい？

「そう言えば、ムツツリーニは試験の数週間前からAクラスの工藤に勉強を見てもらっていたそうじゃ」

「えっ、そうなの？」

工藤さんと言えばムツツリーニ。ムツツリーニと言えば工藤さんと言えるほど仲の良い(?)ライバル関係の二人だ。その組み合わせは不自然ではないが……。

「なあ秀吉。いくらAクラスの優秀なやつに教え込まれたって、あのムツツリーニが保健体育以外の科目でそれなりの点数をとれるようになるには、数週間では無理なんじゃないか？」

「うむ……確かにのう」

とはいえ、ここで談義をしてもしょうがない。本人に事実確認をとらないと。

『キーンコーンカーンコーン』

「おっ、ちょうどいいな。Cクラスに行って本人に聞くとするか」
「というか今まで授業中じゃったのじゃな」

あれ？ そう言えばおかしいな。

「雄二」

「なんだ？」

さっきコイツは『霧島さんが来たら居ないと言ってほしい』と頼んできた。

「どうして授業中なのに教室から出てきたの？　いくら霧島さんとはいえ、授業中に隣のクラスに攻め込みに来るとは思えないんだけど？」

「ああ、それなら」

雄二は立ち上がり、僕と秀吉の腕を引っ張って廊下に出てドアを閉めると、爽やかな笑顔でこう言った。

「翔子ならチャイムが鳴ると同時にBクラスに攻め込んで、いないとわかったらFクラスに來ると予想したからだ」

「もう突っ込まんぞ」

カラカラ（Fクラスの窓から誰かが侵入した音）

『……雄二の匂いがここからする』

霧島さんは人間の範囲を越えているんじゃないだろうか。

「おっ、予想より早かったな」

「突っ込まんぞ」

秀吉の目に光が灯っていないように見えるのは気のせいかな？

「そう言えば雄二」

「うん？」

「去年は霧島さんには先を読まれっぱなしだったけど、克服したの？」

「全ては経験だ」

なんでだろ。コイツが言つと凄く説得力がある。

「さあ、翔子がFクラスで油売ってる内にCクラスに行くぞ」
「おおっ」

「ワシは『常識』と言つものを知っている人間に会いたいのじゃ…」
「…」

問十一（疑問）

「さて、と。準備はいいか二人とも？」

「うん」

「うむ」

現在僕らはCクラスの入り口の前に立っている。新学期早々に騒ぎを起こすわけにもいかないし、極力丁寧に行こうというのが僕らの見解だ。

「よし、じゃあ行くか」

コンコンッ、ガラララッ

「Bクラス「きゃああっ」代表の「わああっ」坂本だ。Cクラス「さ、坂本だあっ」の「た、た、助け」代表は「頼むから巻き込まないでくれ！」いるか？」

ガラララッ、ピシャッ。

この間4秒。

「悪名名高いというのも困り者じゃのう」

「同情するなら俺のいい評判を広めてくれ」

じゃあ同情しない、というのが僕の選択肢だったりする。

やれやれ、雄二じゃ頼りないから僕が代わりにムツツリー二を探してあげようかな？「えっと、Fクラス代表の吉井明久です。ムツツリー二はいる？」って感じでいいだろう。

コンコンッ、ガラララッ

「え『今度は吉井明久が来たああああああっつつつ！！！！
！』る？」

ガラララッ、ピシヤッ。

どうしよう、結果的にアルファベットしか喋ってないよ。
秀吉がやれやれ、と言いたげに首を横に振った。

「仕方ないのう。二人とも見ておけ。ムッツリーニを呼び出すには
これが一番じゃ」

そう言つと、秀吉は胸に片手を当てて大きく息を吸った。

「きゃああつ、スカートがめくれちゃううっ！！（女子声）」

パシヤッ、ザツツツッ！！！！

着地の前にもシャッターを押すなんて荒業をしながら、一人の高
校生がCクラスから飛び出てきた。

「さて……ムッツリーニに話を聞きますか」

「盗聴の心配がない」というムッツリーニたつての希望で、場所は
Cクラスで会議開始。

「聞きたいことはわかっていると思うが、ムッツリーニ。お前が試験でCクラス代表レベルの点数をとった方法を教えてくれないか？」

雄二がストレートに質問をする。コイツはこういうときの交渉が天的に上手い。僕も代表としてこんな風に出るだろうか。

「……………理由は簡単」

ムッツリーニが腕組みをしながら答える。

「……………それだけの学力を身に付けた」

「ムッツリーニ、それってどういう——」

ガラッ

「ムッツリーニくーんっ！ おめでとーっ」

「……………っ！！（ダバダバ）」

僕の発言を遮り、教室に飛び込むや否やムッツリーニに抱き付き、鼻血を大量に流させたのは、

「工藤さん、ムッツリーニが困ってるよ？」

Aクラスの工藤愛子さんだ。

「あれ？ 吉井君たち、居たの？」

「うむ、ムッツリーニの得点には驚かされたからのう。経緯を聞きたくて来たのじゃ」

当の本人は工藤さんの腕の中で気持ち良さそうに流血している。

「そつか。じゃ、ムッツリーニ君はしばらく生き返りそうにないし、ボクが教えてあげるよ」

「ああ、助かる」

（工藤までも流血が普通だと認識しておるのか……）

秀吉が何かぶつくさ言ってるけど、工藤さんが教えてくれるなら嘘は無いだろう。

「えっとね、色々あってボクがムッツリーニ君に勉強を教えることになったんだ」

「工藤よ、その色々、という部分は教えてもらえんのか？」

「うーん。ちょっと長いし、彼の個人的な事だからまた後でいいかな？」

「ああ、いいだろ」

「うん。じゃあ話すよ。ムッツリーニ君があれだけの点をとれたのはね——」

問十二（真実）（前書き）

工藤さんの回想シーンとなります。

一応、辻褄は合わせたつもりです（汗）

問十二（真実）

「ムツツリー二君。勉強教えるのはいいけど、最終的にどこに入りたいの？」

「……………Cクラス上位、もしくはBクラス下位レベル程度」

「それなら総合で1600点程度が目標だね。一応聞いとくけど、今までで最高はいくつくらい？」

「……………1000点が平均」「えっ……………てことはあと三週間で600アップを目指すわけかな？」

「……………今から紐なしバンジーをしてくる」

「それは飛び降りと大差ないよ！？ 早まるのはまだ早いから！」
「……………本当に？」

「うん。厳しいけれど、ムツツリー二君は伸ばす余地なら吉井君並みに沢山あるからね」

「……………明久と比べられた」

「ハイハイ、現実見ないと。ボクが優しく教えてあげるから」
「……………恩に着る」

「感謝は試験の後でね？ それで、確か保健体育は本気を出せば700点行けるよね？ 覗き騒ぎのとき、そうだった気がするけど」
「……………あれは実力以上。多分600が限界」

「そっか……………。ならあと9科目で1000点……………一教科平均110以上か。今がFの下位だとして、Eの上位を目指すつもりじゃないとダメだね。それも全部の科目だから、平均して一教科あたり3日も勉強出来ないよ？」

「……………終わった？」

「うつん、まだ終わリじゃない。なにか抜け道があるハズだよ。」
『選択科目制度』が始まるから、教科は移行出来るし」

「……………でも、俺は保健体育にしか興味が湧かない」

「そつだよねえ。はあ……」

「……………工藤」

「なんだいムツツリー二君」

「……………無理なら無理と言ってほしい」

「ほえっ？」

「……………工藤の邪魔はしたくない」

「そんな風に思わなくていいよ？　むしろムツツリー二君は保健体育のライバルなん——」

「……………どうした？」

「ね、ねえムツツリー二君っ」

「……………？」

「エッチなコトは好き？」……………っ！！（ドバツ）」「ああっ鼻血を止めてよ！？　別に誘惑したわけじゃないからっ！」

「……………紛らわしい」

「ごめんごめんっ。ムツツリー二君の性欲を生かした勉強法を思い付いたんだよっ！」

「……………教えてくれ」

「うん。まずは古典。『源氏物語』や『千夜一夜物語』なんかは浮気とか色っぽいお話が多いよね？　勉強する意欲が湧くと思うんだけど？」

「……………盲点だった」

「あはは。それに、古典が出来れば自然と現国も少しは出来るようになるし」

「……………でも、それだけじゃ全然足りない」

「んふふ〜。まだまだこれからさ。世界史なんかどう？」

「……………全く興味がない」

「全部じゃないよ。ある一部に限定して勉強するんだ」

「……………ある一部？」

「裸像のトコ」

「……………そんなものでは興奮しない（ダバダバ）」

「ああもうまた鼻血が！」……………構わない、続ける」

「ホントに大丈夫かな！？ あ、あとは地理。将来色んな国の女の子と触れあうかも知れないから、世界の文化は学ぶべきだよ」

「……………夢がある」

「その夢を見る前に死んじやわないでね？」

「……………大丈夫、輸血の準備はしてある」

「鼻血を止める努力をしないあたりが男らしいよ……………」

「……………勉強する範囲はこれで決まり、か？」

「ううん、まだあと一番いい所が残ってるよ。それはね———生
物さ」

「……………？」

「実は遺伝とか『受精』の分野って難しくて平均点が低めなんだけど、ムツツリー二君なら満点も狙えるし、他の数学とかは基本を抑えて部分点を……………って意識失って聞いてないね」

「……………（ドバドバドバ）」

「はあ……………三週間で何リットル輸血すればいいんだろ……………？」

問十二（真実）（後書き）

感想よろしく願います！

問十三（協定）

「——とまあ、そういうことだよ。納得してくれたカナ？」

「うん、納得できたよ」

でも、理論上納得できるとはいえ、たった三週間でそこまで成績を上げられるムツツリー二も凄い。

「ただ、一つ困ったことがあるんだよね」

「一体なんじゃ？」

秀吉が聞くと、工藤さんはムツツリー二の頭をポンポンと叩いて溜め息をついた。

「ムツツリー二君は勉強してる間ずっと鼻血を出してるから、多少の流血なら気にならなくなっちゃってね……」

「……………あれは知恵熱のせい」

「それでさつきも平然としておったのじゃな」

工藤さんは去年までは木下姉妹の次に常識のある女の子だったんだけど、流血に慣れてしまうと大分常識人というカゴテリーから外れてしまうかもしれない。

「なあ工藤、ちょっと聞いていいか？」

突然雄二が割って入ってきた。

「何？ あ、代表のことなら直接本人に聞いた方がいいよ」

「いや、それなら嫌でも家に連れ込まれて聞かされるから心配はい

らん」

開き直ったなコイツ。

「俺が聞きたいのは……根本のことだ。今日は休んでいるらしいが？」

「あはは、それね……」

工藤さんの表情が曇る。そういえば根本君はAクラスに入ったんだっけ。去年Bクラス代表だったんだからあり得ない話じゃない。

「実は、ボクもあんまりいい気がなくてね。代表と姫路さんは前に翻弄されたことがあるみたいだし、優子とは合わないそうだし。悪い予感はあるんだ」

「翔子や木下を嵌めて主導権を握りかねないからな。小悪党が力を手にしたら一番厄介だ」

実際、根本君の評判はかなり悪い。それに去年は姫路さんのラブレターを盗んだり、嫌なタイミングで試召戦争を仕掛けてきたりと色々かき回された。

その根本君がAクラスに入ったということは、一体何を意味するのだろうか？

「そこでだ。この場にいるやつで協定を結びたい」

「協定、じゃと？」

「ああ。今回の振り分け試験は何かとイレギュラーが多かった。俺も多少は予測していたが、まさか元Fクラスが四つに分散してしまうとは思わなかった」

特に、雄二とムッツリー二については雄二も予想外だろう。もち

ろん、僕がFクラス代表ということも。

「そこで、今後不測の事態が起こったときに対応するために協定を結ぶんだ」

「成る程のう」

雄二は僕やムツツリー二、秀吉という特殊な手駒と姫路さんという強力なカードを失った。もちろんBクラスの生徒は成績優秀だが、手駒としては普通かもしれない。

ムツツリー二や僕は指揮官としての能力に欠けるし、何よりムツツリー二はクラスに知り合いがない。何か起きてすぐに対応出来るとは言い難いだろう。

「明久、お前の周りにいる面子をよく見てみる」

えーっと、この場には、

「美少女が二人とムツツリが一人とゴリラが一匹いるね」

「吉井君、ムツツリだなんて酷いな。ボクはオープンなエロを追求しているのにつ」

まさか雄二より先に工藤さんが乗ってくるとは思わなかった。

「明久。俺が聞いているのはそういうことじゃない。B、C、Fクラスの代表とA、Fクラスの生徒がいるんだ」

「あ、なるほど」

「根本に不審な動きがあつたら連絡し、不測の事態が起こつたら極力協力しあう、というのが協定の内容だ」

代表としての経験が無い僕としてはありがたい内容だ。

「僕は協力するよ。秀吉はどう?。」

「異論はないぞい」

「ボクはちよつと優子に話さないとわからないかな? ムツツリー
二君は?。」

「……………協力する」

「よし、決まりだな」

そういう雄二の顔は心底安心したように見えた。

問十四（不服）（前書き）

アクセス15000突破！

ご愛読ありがとうございます。

問十四（不服）

「さてと、目的も果たしたことだしそろそろ行くとするかな」

雄二が立ち上がり、僕と秀吉もそれに続く。

「うん、もうすぐ休み時間も終わるし、そろそろ戻った方がいいかもね」

もう鉄人も異端審問会の鎮静を終えているだろうし。

「戻る？ 何言ってるんだ明久」

「ほえ？」

なんだろ。まだ忘れてることってあったかな？

「……………次の時間、代表は学園長室で集会がある」「朝のホームルームで担任から言われたはずだが？」

朝のホームルーム？ えっと、その時間は

「鉄人が異端審問会の鎮静に追われて時間が経っちゃったんだよね」

「あはは。そこはずっと変わらないんだね、Fクラスって」

工藤さんが楽しそうに笑っている。正直異端審問会って笑って過ごしていい組織じゃないと思うけど。

「ちなみに対象は雄二じゃ」

「…………… Bクラスの設備に、数ヶ月で結婚可能」

「そりゃ誰でも恨んじやうんじやないかな？」

「俺の人生なんだからほつといてくれ！」

ほつといても霧島さんとの結婚は逃れられないと思うんだけど。

「ねえ雄二」

「…………… なんだ、明久」

「代表同士の会合なら、否応なしに霧島さんと同席だと思うんだけど、対策はあるの？」

實力通りにAクラスに入れなかった挙げ句、休み時間中霧島さんから逃げ続けていたんだ。知られたら折檻は免れないだろう。

「大丈夫だ」

そう言つて笑顔で端末を取り出す雄二。

「ボタン一つで救急車を呼べるように手配してある」「怪我する」とは確定事項なんじゃな」

「…………… 不可抗力なら致し方ない」

「男らしいよ雄二」

「日頃から理不尽な暴力にあつてしていると避けることより極力後処理を考えるみたいだね」。面白いなあ」

当の本人は必死であると言つことを工藤さんには知って欲しい。

「さあ、行くぞ明久、ムッツリー二」

「よしっ」

「…………… 頑張る」

「ワシらは教室へ戻っておるぞ」
「頑張つてね」

僕らはそれぞれの目的地へと向かった。

コンコン

「失礼しま——邪魔するぞババア」

「きちんと最後まで敬語で話せないのかいガキ共!？」「ちよつと学園長!　なんで僕らも含まれてるんですか!？」

「……………不服」

「安心しな。土屋は含んでないさね」

「やつぱり僕は含まれてるわけ!？」ムツツリー二と僕で扱いが違いすぎない!？」「……………日頃の行い」

日頃の行いというなら、ムツツリー二は逮捕されても構わないレベルだと思うけど。

「うるさいわねまったく。多少は静かに出来ないの?」

脇のソファーに座っていた女子生徒が文句を言ってきた。えーつと、あれは

「げっ、中林さん?」

(おそらく)Eクラス代表の、『髪筋姉ちゃん(雄二命名)』こと中林さんだ。

「『げっ』って何よ！ 失礼じゃない？」

「だってあんまりいいイメージを持ってないから」

「それを直接本人の目の前で言うの！？ だからアンタは気に入らないのよ！」

（おそらく、久保と明久が一緒になったのが気に入らないんだろうな）

（……………色々、憐れ）

問十五（集会）

「失礼します。Dクラス代表の平賀です」

僕が中林さんにやいやい言われていると、平賀君が学園長室へ入ってきた。

「これであとは翔子だけか。まったく、学年首席なんだから一番に来てもいいものだろうに」

雄二がやれやれと呆れた呈で言った。内心折檻されずに済んでホッとしているのだろう。

「坂本、アンタ何言ってるの？」

「中林、どうかしたか？」

雄二の言葉に応えるように、中林さんが僕らの方へ指をさした。

「Aクラス代表なら、アンタの後ろに立ってるじゃない」

「……リアリィー？」

おっと、これは僕も気づかなかった。霧島さんは気配を消すのが上達したなあ。

「……雄二、あとでお仕置き」

「……俺、この試練に耐えきれたら、大きな白い犬を飼おうと思うんだ」

「…………死亡フラグ」

「ねえムツツリーニ、火葬場ってどうやって手配するんだっけ？」
「この人達、三年になっても相変わらずなんだね……」

あ、平賀君のツツコミって結構新鮮かも。

「まったく、バカは進級しても治らないのかねえ。全員揃ったんだからさっさと話し合いを始めるよ！」

とりあえず僕らは雄二の処刑を中断させて、学園長に対立するように横長のソファーに座った。学園長から見て左からA〜Fとなる並びだ。

「それで、今回の集会はどういう目的なんだ？」
「……アンタに進められるのは癪だけど、ちゃっちゃと終わらせるかねえ。」

単刀直入に言うよ。今回の集会の目的は——「」

学園長はそこで全員の顔を左から見回し、——最後に僕の顔を凝視して言った。

「——試召戦争の制限について、さね」

——へ？

「ち、ちよつと待って下さいよ学園長！ 試召戦争が出来なくなったら、設備交換が出来ないじゃないですか！」

それに、このシステムは生徒のモチベーションを上げるきっかけ

だつたはずだ。

「黙りな、観察処分者。これにはちゃんと理由があるんだよ」

学園長は『余計な口を挟むな』とでも言いたげに僕を睨み付けている。

「で、その理由って何なんだ？ まあ大方予想はつくがな」

「え？ 雄二は予想出来てるの？」

「っていつか何でアンタは出来ないのよ！ バカにも程があるわよ！」

中林さんって機嫌がいい時ってあるんだろうか。

「よく考える明久。俺たちには今年受験があるだろうが。試召戦争でゴタゴタを起こして入試に影響したら問題だろ」

「あ、なるほど」

「坂本の言う通りさね。ある程度なら許可はするけど、流石に夏休みのあとは許可できないよ」

そつえば、学期が変わることに設備のリセットなんていう制度もあった。あれは受験に影響しないためにも作られたのだろう。

「まあ、三年になって色々細かいルールが出てくるから、今から説明してやるさね」

問十六（選択）

「……ルール？」「……」ああ。アンタらも知つとるだろ？
『選択科目制度』のことだよ」

……えーと、なんだっけ、それ？

「いまいちピンと来てないようだな。明久に限って」「……………学
年が上がる前に説明されたはず」

「……吉井ならしょうがない」

「待って！ このメンバーで霧島さんまで敵に回つたら常識人は平
賀君だけじゃないか！」

皆代表なんだからちよつとは常識を知ってほしい。

「……近寄らないでくれるかな？ 船越先生のカレシ君」

「だからその噂はでっち上げたって！」

「ていうかなんで初期段階でアタシは非常識扱いされてるのよ！？」

もう僕の味方は秀吉しかいないんじゃないだろうか。

「……話を進めるよ。『選択科目制度』って言うのは、物理・化学・
生物・地学・と地理・日本史・世界史が選択制になる三年から、試
召戦争でのルールを若干変えることだよ」

なんとなくわかったけど、いまいち理解しづらい。

「具体的に、どういうものなんですか？」

「例えば、理科系で言うと【物理 生物】【化学 地学】のように、それぞれ対応する科目に置き換えられる。吉井と土屋、ちょっとやってみな。召喚許可は出してあるさね」

むう。確かにやってみた方が分かりやすいだろう。

「オツケー、試獣召喚！」……………試獣召喚」

『Fクラス 吉井明久
物理 101点』

「おお、だいぶ上がったみたいだな明久」
「へへーん。伊達に勉強してないよっ」

苦手な科目でも三桁前後がとれるようになった。これは雄二たちとの勉強での成果だ。
さて、ムッツリー二は、

『Cクラス 土屋康太
生物 183点』

「……………え？」

く、工藤さんから聞いて大体予想はしてたけど……………ホントにBクラスレベルの点数を持ってたんだ。

「とまあ、こんな感じで生物と物理はリンクして戦闘可能さね。今は『物理・生物フィールド』を展開中だよ」

「これで理系と文系が同じ条件で戦える、ということだな」

「その通り、『化学・地学フィールド』も同様さね。ちなみに、化学教師でも地学のフィールドを作れるのと同じだから注意しなよ」

そう言うのと、学園長はフィールドを消した。僕とムッツリー二の召喚獣が同時に消える。

「あれ？ 学園長。そういえば、僕とムッツリー二の召喚獣の装備が変わっていなかったような……？」

「……『選択科目制度』への変換に手間取って遅れたんだよ。あと二週間は待つて欲しいさね」

なんだ。ババア長お馴染みの調整不足か。けっこう慣れたからいじる気もしない。

「さあ、次は社会科系だよ。これも召喚した方が早いさね」
学園長が新しいフィールドを形成する。社会科なら僕の得意科目だからだいぶ影響するだろう。

「じゃあ、吉井vs土屋&中林でお願いするかね。分かりやすいように、召喚獣を攻撃してくれると助かるねえ」

それは僕の身体的ダメージは決定的付ける宣告だった。

「……………学園長はいい人」

「ムッツリー二！ 君まで暴徒化してしまったら僕は痛みで死んじやうよ！」

「……………試獣召喚」

「いくわよ吉井っ！ 試獣召喚！」

「さ、試獣召喚……………」

これって、僕はっかり損しそうな気がする……。

問十七（重要）

『Fクラス 吉井明久
世界史 180点

VS

Eクラス 中林宏美
日本史 90点

&

Cクラス 土屋康太
地理 169点

『

「社会科はこの三科目の中から二つ選ぶことになっているんだ。だから理科系と違って単純なリンクじゃないんだよ。今は『社会科フイールド』を展開中だね」「確か、戦闘では選んだ科目の点数が高い方が使われるんだよね」
「その通りだね」

つまり僕は今回の振り分け試験では、日本史より世界史の方が点が高かったと言うことだろう。

「じゃあちよつと実験さね。中林！」
「はい？」

中林さんが不思議そうな顔でババアを見た。

「吉井を殴りな」

「仰せの通りに」

「待って中林さん！ 学園長が言ったのは召喚獣のことで本体への暴力を促すものではないから！」

「じゃあ本体を殴った上で召喚獣も殴るから」

「鬼だ鬼がぶぎゃあっ！」

中林さんのパンチを避けたものの、召喚獣の方は一発喰らってしまった。

「このように、世界史と日本史はリンクしているってわけか。なるほどな」

「納得してないで止めてよ雄二！」

アイツも少しは僕の痛みを知った方がいい。

「そうだな。おいムツツリー二」

「……………」

「お前も『中林に』加勢しろ」

「ちよつと雄二、日本語が……………御意」おかしいよ二人ともぶぎゃあ！！」

中林さんは点数が低めだからまだそれほど痛くないけど、点数が近いムツツリー二の攻撃はかなりのダメージだ。

「ああ、世界史と地理もリンクしてるのか」

「ババアに聞けばすぐ分かる知識だろ！」

「いや、どうせ同じ知識ならお前をボコったほうが印象に残るからな」

「そんな斬新な記憶法で覚えなくていいよ！」

こんな暴拳を容認してる学園って、社会的に大丈夫なんだろうか。

「じゃあ最後さね。土屋、中林を攻撃しな」

「……………御意」

ムツツリー二の召喚獣が音もなく中林さんの召喚獣の後ろへ回り込んだ。まるで本当に忍者みたいだ。

中林さんの方は僕の召喚獣をマウントポジションをとりながら殴り続けていて気づかないらしい。

「……………切り捨て、御免」

ムツツリー二の小太刀が中林さんの首を捉えて——僕の召喚獣へ刺さった。

『Fクラス 吉井明久

世界史 0点』

「ぎゃあああああつ！！！！」

痛いっ！ 鋭利な刃物って即効性があるからすごく痛いっ！ っ
てなんで僕に攻撃が当たるの！？

「……………成る程。見るまで分かりにくかった」

「ああ。これで『日本史と地理はリンクしていない』という説明の意味がわかった」

坂本夫婦のトークが今は無性に恨めしく感じる。

「分かって貰って何よりさね。日本史と地理は同じ社会科系とはい

え、勉強する範囲も難易度も別物だからね。リンクはしていないよ」
「実際の試召戦争では、同じ世界史・日本史・地理の『社会科フィールド』で戦闘するが、日本史と地理の召喚獣はお互いに触れ合えず、透けてしまうのか」

だから中林さんに仕掛けたムツツリー二の攻撃が僕に当たったのか。

——あれ？　これって僕にとって物凄く重要な問題なんじゃないか？

「そうさね。分かりやすいだろう？」

「ああ。大変参考になった」

「僕の命を犠牲にした上での知識だけだね！」

問十八（惨事）

「さて、新しいルールについての説明は終わりさね。まだ質問があったらいつでも受け付けるよ」

学園長が機嫌良さそうにフィールドを消した。システムの変更が上手くいったのが相当嬉しいんだろう。

「おいババア。新ルールについての説明は俺たち代表だけにするのか？ クラスメイトへの説明は誰がやるんだ？」

それは僕にとって、結構重要な問題だったりする。AクラスやBクラスのような成績優秀な生徒が集まるクラスなら、誰が説明しても一回で理解出来るだろうけど、Fクラスの生徒に僕が説明するなんて大惨事は避けなければならない。

「大丈夫だよ。それは担任が説明することになっているし、それに」

学園長はパソコンをいじりながら言った。

「この映像もあるさね」

「ん？ なんの映像だ？」 「さっきの戦闘の一部始終だよ。CCDカメラで撮っておいたのさ」

あ、そうか。さっきの映像も見せれば話だけより分かりやすいもんね――

「――っていつの間に録画してたの！？ それよりこの部屋、

いつの間にカメラを仕掛けられてたの!？」「つい最近だよ、秘密裏に、ね。去年は勝手に忍び込まれたり、都合よく使われたからね。今年はセキュリティをしつかりしたのさ」

「畜生それじゃ安全にお昼ご飯を食べられないじゃないかつ!」

「お前はこの部屋で飯を食うことに問題があると思わないのか?」

だつて屋上で美波とご飯食べてると清水さんとか清水さんとか清水さんに襲われるんだもん。

「質問は無いのかい? 用が無いならもう帰ってくれていいよ」

「へ? もう集会は終わりなんですか? アタシたち代表全員が集まる意味があつたのかしら?」

中林さんの言う通り、このくらいの用なら、いつもみたいに僕や雄二たちを呼べば済んだはずだ。

「ああ。振り分け試験ではちよつくら意外な結果も出たしねえ。軽く顔合わせでもしておいて損はないだろう?」

「それだけか?」

雄二が足を前に投げながら学園長を睨んだ。まるで強請をする不良みたいだ。

「アンタがそんなやわな理由で呼びつける訳もねえ。もうちょい理由があるんだろ?」

「……本当にお前はこういうときに頭が回るねえ。」

ああ、そうだよ。アタシがアンタらを呼んだのには他に理由があるんだ」

「……どんな理由、ですか」

「それはね——」

学園長は眼鏡をくいつとあげて、口をゆつくりと動かした。

「——ただ単に、吉井がボコられる姿を学園中に見せびらかしたかっただけさね」

「肖像権の侵害だ!!」

「（ポチッ）これで動画が全クラスに行き渡ったよ」

なんでこの学園は人権侵害が日常的に行われているんだろう。

「さあ、もうアタシはすることがないよ。今の内言っておきたいことは無いのかい？」

「では学園長、僕から一つよろしいでしょうか」

そうキリッとした振る舞いで名乗ったのは、

「なんだい、Dクラス代表」

平賀君だった。

「この場を借りて、宣言させて頂きます。我々Dクラスは——
Fクラスに試召戦争を申し込みます」

問十九（開戦）

「アキ！ 木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ってたわよ！」

「ええっ！？ くそっ、せめて新校舎まで突っ切れると思ったのに！」

僕が代表として指揮をとる、記念すべき初陣は苦戦を強いられていた。

「単純に戦力差の問題よ。いくら試召戦争に慣れているからって、Dクラス相手じゃギリギリ互角ってところね」

美波の言う通りだった。雄二ではなく僕が指揮をするために作戦は正面突破になりがちな上、ムツツリー二がいなかったために情報戦というわけにもいかない。

「で、結局作戦は当初のままなの？」

「うん。秀吉たちには踏ん張って貰って、清水さんと久保君が回復試験を終えるのを待つしかない」

「……去年もそんな作戦だったわね。あのときは瑞希だったけど」

少し戻って、学園長室。

「試召戦争は、本日の昼休みから行います」

「ちよつと待つてよ！ な、なんでDクラスがFクラスに攻めてくるのさ！？」

そもそも、僕はDクラスとはそんなに敵対していないはずなのに。去年もあまり関わりがなかった気がする。

「理由は、例えば去年のお返しとか景気付けとかはあるけど、一番の理由は、」

平賀君が人差し指をピンと立てた。

「『イレギュラー要素を排除すること』だ」

それは、当然Fクラスのことを指しているのだろう。

「久保君、清水さんという新戦力。演劇部の木下秀吉。試召戦争における去年の実績。そして何より、『新指揮官・吉井明久』。

おそらく、全員が能力をフルに発揮したらFクラスはAクラスに匹敵します」「それを、結束が強まる前に消しまおうって魂胆か。随分と試召戦争に積極的だな、平賀」

平賀君がフンツと鼻を鳴らして僕と雄二を一瞥した。

「積極的？ その逆だよ。 今年受験なんだ。変な奴らに振り回されないように、先に手を出しておくだけさ。元々仲の良かった君たちには出来ないだろう？」

変な奴ら？ それは多分僕みたいな常識人じゃなくて雄二みたいな奴なんだろうけど。

「じゃあ僕も、何か宣言しちゃおうかな？」

「……………明久？」

はつきりとした声を出すために、大きく口を開ける。

「我々Fクラスは——」

「美波、戦況はどう！？」

「みんな頑張ってるけど、あと五分持たないわよ！」

戦闘に参加するため、振り分け試験で手を抜いてしまった久保君と清水さんには一科目か二科目の回復試験を受けるように言っている。戦争が始まってから大体50分だから、せめてあと10分は確保してあげたい。

回復試験が終わり次第、強引に攻める予定だ。

「アキ。こうなったら、今の内に一か八か突っ込んだ方がいいんじゃないの？」

色々考えていたら美波が進言してきた。

「いや、せめて久保君だけでもまともな状態にしたいんだ。それまで耐えた方が確実だと思うし」

「それならウチの数学でも同じことでしょ？　これ以上戦死者を増やすとやりにくくなるわよ」

うつ……………美波の言うことも一理ある。

「だけど、美波にはやって欲しいことがあるんだ」
「？ 何か特別な役目？」

そう、それは付き合いの長い美波にしか頼めない事だ。

「うん。僕をずっと守って欲しいんだ」

力のある者が攻めるのもいいけど、近衛兵として本隊に携わる人間も必要だ。

「吉井君。生物と世界史の回復試験が終わったよ」

「あ、久保君！ よし、Fクラス本隊、Dクラスへ突撃だ！」

『おおーっ！』

「お姉さま、お気を確かになしてくださいませ！」

「……………ハッ！？」

「一斉突撃だそうですね。お姉さまもはやく行きましょう」

「うん……………わかったわ……………」

「どうなさったのですか？ ご様子が変わですよ？」

「美春……………ウチさ……………」

「はい」

「もしかして、告白、されちゃったのかな……………？」

問二十（終戦）

「あ、あそこに秀吉たちがっ！ 久保君よろしく！」「わかった。田中先生、久保利光が召喚します。試獣召喚！」

『Fクラス 久保利光

世界史 276点

VS

Dクラス 鈴木一郎

Dクラス 笹島圭吾

世界史 87点&92点』

「な、なんだって!？」

「なんでまたFクラスにこんな化け物が！」

久保君の回復が予想外に早かったのか、Dクラスの部隊には混乱している様が垣間見えた。

「明久！」

「秀吉、応援に来たよ」

前線で指揮を執ってもらっていた秀吉と合流。
これでFクラスの主力が揃ったっ！

「くっ！ ここは退くぞ！ 全員遅れるな！」

Dクラス部隊長の命令で、敵全員がDクラスへ引き返して行った。

「Fクラス、全員追え！」

一旦退いて体勢を整えてもいいが、久保君がいる以上は攻めてケリをつけた方がいい。

「明久よ、ちよつと無茶ではないかの？」

「無茶かも知れない。でも……僕はバカなんだから考えるより進んだ方がいい！」

躊躇う秀吉を振り切つて走っていると、Dクラスの教室についた。すぐにFクラス全員も到着した。

「覚悟はいいか皆！ 戦死覚悟で突っ込んで、平賀君までの道を開くんだ！」

「せ、戦死覚悟？」

「俺たち、特攻隊かよ……」

『戦死覚悟』というフレーズに恐れをなしたのか、Fクラスには動揺が走った。僕だって戦死は嫌だ。だけど皆には犠牲になつてもらうしか他はない！

「ふざけるんじゃないやありません！ 美春たちをなんだと思ってるんですか！」

集団の後方から清水さんの声が聞こえてきた。横には美波がいる。

「あなたは、兵を動かすのが下手くそです。美春がお手本を見せます——！」

「お手本じゃと？」

「ええ。……いいですか皆さん。あの平賀という男は——」

清水さんがゆっくりと溜めをつくる。僕はそれを静かに聞いている。

「——Eクラスの三上美子と恋仲です」

『Let's PARTY!!!!!!』

『『I see!!!!!!』』

ガシユッガシユガシユッ

「道を開くどころか焼け野原を作っておるぞ」

「ふふっ、上出来です」

清水さんがモーゼの生まれ変わりに見えるよ。

「くそっ！　なんてことだっ！」

教室の中では平賀君が地団駄を踏んでいた。

「じゃあ久保君、よろしく」

「うん。では、田中先生。召喚許可を」

「……僕たちの……Dクラスの、敗けだ」

Fクラスの隣の空き教室で、戦後対談が行われている。集まったのは、Fクラスの主要メンバーと平賀君だけ。

「どうするんだ、吉井。僕らの設備と交換するか?」「いや、その必要は無いよ」

「ど、どういうことじゃ、明久」

「いや、例の協定にDクラスも参加してもらおうと思ったからさ」

「……なるほど。名案じゃのう」

ここで、あの場にいなかった人に説明をした。

「僕は吉井君の言うことなら反対しないよ」

「……悔しいですけど、ブタ野郎にしてはまともな意見です」

皆も根本君のことは気にしていたみたいで、難なく賛成してくれるみたいだ。

「美波は? 賛成?」

「………」

「……美波?」

「……え? あ、うん。それでいいわよ」

なんだろう、戦争の途中から美波がしおらしい。

「受験に影響しない範囲なら同意するよ。Dクラスには説明しておく」

「ありがとう、平賀君」

よし、これでやっと試召戦争が終わった。後で雄二たちに協定のことを言っておこうと。

「そうか……Fクラスの勝利、ね」

『……どんな感じ？』『まあまあ予想通り、ってところかね』

『……それはよかった』

「おいおい。この根本恭二と組んでるんだから、もう少しテンション上げるよ」『……上げられるわけがない』

「そうだな、お前は脅迫される立場だもんな——」『ムッツリー

二』

問二十（終戦）（後書き）

次回から清涼祭編になります。

問二十一（企画）（前書き）

清涼祭編開始します

問二十一（企画）

「……雄二」

「なんだ？」

「……『如月ハイランド』って知ってる？」

「知ってるも何も、去年お前と行ったじゃないか」

「……じゃあ、そこで『一周年記念イベント』が開かれるのは知ってる？」

「うん？ それは知らなかったな。そうか、あれからもう一年経つのか」

「……それで、そのイベントが開かれたら、私と」

「ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そのイベントが開かれたら——」

「……うん」

「姫路たちと行ってこいよ」

「……握力には自信がある」

「ぐあああつ！ アイアンクローはよせっ！」

「……じゃあ、巴投げ」

「お前にも多少のダメージがいくぞ、それ」

「……私と雄二、二人で一緒に行く」

「いや、込むから無理だぐぎゃあっ！」

「……それなら、プレミアムチケットがあつたら行ってくれる？」

「プ、プレミアムチケットだと？ あれは相当入手が困難らしいぞ？」

「……行ってくれる？」

「んー、そうだなー、手に入ったらなー」

「……本当？」

「あーあー。本当本当」

「……それなら、約束」

「ああ、約束な」

「……それと、雄二」

「うん？ まだ何かあるのか？」

「……うん、清涼祭の召喚大会に、私と出て」

「召喚大会？ 去年みたいに木下姉と出たらいじゃないか」

「……優子は今年、出られないみたい。それに、雄二と出たい」

「へーへー、しゃあねえな」

「……もし手を抜いたら」「抜いたら？」

「……この婚姻届けを役所に提出する」

「全力で優勝を目指そう」

「さて、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけないんだが——
——」

ホームルームの始め、Fクラスの担任である鉄人が僕らを見下ろしながらそんな宣言をしてきた。

「代表を中心に、出し物を決めてくれ」

え？ 僕任せ？

「わ、わかりました」

鉄人に代わって壇上に立つ。鉄人かというと、教室の隅の椅子に座って威圧していた。去年からこのクラスに関わっているだけあって、警戒には余念がない。鉄人が警備してくれるなら暴走は避けられる。僕は笑顔で皆に対応するでしょう。

「じゃ、美波。手伝って」「へっ？　ウ、ウチなの？」

珍しく美波が動揺している。試召戦争の時からなんだか様子が変だ。

「うん、去年みたく仕切ってくれると助かるな」

「じ、じゃあやってあげるわよ」

すたすたと壇上に上がる美波。僕は板書に移るとするかな。

「それじゃ、やりたいものがあつたら言ってくれる？」

『『『木下のコスプレが見たい』』』

「何故揃いも揃ってその意見なのじゃ！」

僕も見たくない訳じゃないけど、この立場としては皆の意見は面倒だ。

「そうじゃなくて、お店の種類を言ってよ。意見があつたら手を挙げてくれる？」

すると何人かが挙手をした。

「はい、久保君」

久保君なら真面目だし、まともな意見が出てくるだろう。

「僕は皆の案をまとめてみたんだが……」

おお、流石久保君！ あの変態たちの意見をまともなものに変えてくれるというのか！

「僕は『男装喫茶』を推奨したい」

どうしよう。僕の常識がベルリンの壁の如く崩れつつあるよ。

「ドラマや漫画などでは、美人が男装して男子とともに生活する、という形式が多数存在する。特にコリアン系統ではその傾向が顕著らしい。男子がほとんどであるFクラスならではの面白さがあると思うのだが」

ま、まあ真面目な久保君らしく言ってたけど、それって美波と清水さんと秀吉が男子の制服を着るだけだね？

「どうだろう吉井君」

「と、とりあえず書いておくね」

久保君が変なことを言い出さないうちに板書を済ませる。えーと確か、

『男装喫茶【コリアン】』

「他には？ えーと、須川」

「去年同様、中華喫茶を推奨したい」

そのあと『食の起源云々』と続いたけど、結局去年と同じような感じらしい。板書板書っと。

『中華喫茶【ヨーロッパ人】』

「あとは？ ……え？ 美春？ 意外ね」

「はい、美春から提案があります」

毅然とした態度で挙手しているのは、意外にも清水さんだった。

「美春は、『ラ・ペデイス』のミニチュア版をやりたいです」
「なるほどのう」

そう言えば清水さんの実家は喫茶店を営んでいたんだった。店長がバーサーカーであること以外はまともなお店だから、ノウハウとかは知り尽くしているだろう。

『ラ・ペデイス【バーサーカー】』

うん、これでオツケー。

「……吉井を代表にしたのは間違いだったかも知れんな」

クラス表（前書き）

クラス分けの詳細です！

誰がどのクラスか混乱しそうなときは見てください。

クラス表

クラス一覧（は代表）

【Aクラス】担任 高橋

霧島翔子 木下優子 工藤愛子 姫路瑞希 根本恭二

【Bクラス】担任 遠藤

坂本雄二 小山友香

【Cクラス】担任 大島

ムツリーニ
土屋康太 新野すみれ

【Dクラス】担任 布施

平賀源二 玉野美紀

【Eクラス】担任 船越

中林宏美 三上美子

【Fクラス】担任 西村

吉井明久 木下秀吉 久保利光 島田美波 清水美春 須川亮（
その他FFF団）

吉井明久のコメント

「本当に（中林さんと船越先生のいる）Eクラスにならなくて良かった！！」

問二十二（決定）（前書き）

総合評価100突破！

これから引き続きよろしくお願いいたします。

問二十二（決定）

「はい、じゃあこの三つの中から決めるわよ。それじゃ、男装喫茶に賛成の人！——はい、次は中華喫茶！——最後、喫茶店『ラ・ペデイス』！」

少々騒がしい中、美波が挙げられた手の本数をカウントし始める。結果、

「Fクラスの出し物は喫茶店『ラ・ペデイス』にします！ 全員、協力するように！」

中華喫茶と競ったけど、僅差で清水さんの案が通った。やっぱり去年と同じ企画だと味気ないよね。

男装喫茶は久保君と、なぜか秀吉が推してたけど。

「それじゃ、厨房とホールに分かれてもらうけど……この中で料理できる人って、どのくらいいたかしら？」

そう言えば今年はムツリー二と雄二がいない。去年は須川君の飲茶とムツリー二の胡麻団子が主力だったから、誰かが代わりに料理しなけりやならないよね。

「アキ。アンタ、クレープとか作れる？」

「うーん。やったことないけど教われればなんとか出来るかも」

前にあの店でバイトをしたことがあるから、ある程度手順は分かるつもりだ。あとは料理本片手にやれば食べられるものは作れるだ

ろっし。

「お姉様。出来ましたら、美春は接客に従事したいです」

「うん。じゃあ、厨房班はアキと須川のところ、ホール班は美春のところに集まって！」

いつの間にか須川君がお手伝いにされていた。

「それじゃ、ワシはホールにしようかの」

「僕は厨房に回ろう」

秀吉は料理が苦手だから接客の方が良いだろう。それに、バイトでも木下さんに折檻されるまではかなりいい仕事をしていたし。

久保君は料理得意なのかな？ だったら助かるな。

「久保君ってさ、料理上手なの？」

「いや、普段は全くしない」

久保君の行動原理がつかめない。

「じ、じゃあ何で厨房に？」

「うん、僕はあまり愛想がよくないと自覚していてね。接客をするくらいなら、厨房での下準備程度の手伝いをしたほうがいいと思ったのさ」

「な、なるほど」

確かに、接客が苦手なら厨房に回っても構わないけど……狭い厨房にはあまり人数を入れたくないと言うのが本音だ。

「でもさ、久保君みたいなカッコいい人なら、女生徒がたくさん来

てくれそうだからホールのほうがいいと思うな」

「島田さん、僕をホールに回してくれ」

久保君の行動原理がつかめない。

「ところで、美波はどっちに回る？」

「え、ウチ？ うん、どうしよう……。アキはどう思っ？」

「そうだなあ……」

正直、美波はかわいいからホールに回って客寄せして欲しいんだけど、厨房の人数も少ない。

えっと、現在の人事は、

- ・鏡で身だしなみを整える久保君
- ・皆にメイド服姿を強要される秀吉
- ・「オネエサマトオナジホールデハタラキタイデス」とプレッシャーをかけてくる清水さん

うん、

「美波はホールで頼むね」

クラスの秩序が危険だから。

「う、うん。そうするわ」

心なしが顔が赤い美波。本当に最近の美波はどこか変だ。

「吉井、ちょっといいか」

声のした方を振り向くと、鉄人が仁王立ちしていた。

「仏像？」

「歯を食い縛れ」

今のビンタは理不尽な気がした。

「全く……吉井、学園長が呼びだ」

「え？ 学園長が？」

「早く行ってこい。坂本も同席だそうだ」

「げ、雄二も？」

あのババア、またなにか余計なものを押し付ける気だな？

問二十三（腕輪）

「失礼しまーす」

「おや、吉井かい。入りなよ」

「待ちくたびれたぞ明久」……………遅い」

「あれ？ ムツツリーニも呼ばれてたの？」

「……………（コクコク）」

そっか、僕がビリか。でも面倒くさがりやの雄二にまで負けるとは。

「雄二。早いだね」

「ああ、うちのクラスは清涼祭の出し物で盛り上がったな。かつたるいから小山に任せて出てきたんだ」

「ふーん」

まあ、小山さんって気が強いからリーダーシップについては問題ないだろうし。

「さてと、ババア、早く用件を聞かせてくれよ。どうせまた召喚大会のことなんだろう？」

「ふふ、察しがよくて助かるよ」

学園長はなにやら机の中をガサガサと漁っている。

「これを見な」

そう言って乱暴に取り出したのは、

「……………腕輪？」

僕らの持っている『白金の腕輪』とよく似た腕輪だった。色がやや褐色がかっている以外はそっくりだ。

「今年の召喚大会の優勝賞品だよ。前に何度かアンタたちに実験してもらっただろう？ その集大成さね」

あのホンを喋ったり、子供を作るやつのことか。酷い目に遭ってばかりで、あまりいい印象はないけど。

「で、この腕輪にはどんな能力と欠陥があるんだ？」「アンタはもう少し言い方ってもんを勉強したらどうだい！？」

あからさまに欠陥と言われて激昂するババア。そりゃ誰でも自分の作品を貶されたら怒るよね。

「ふう……、まあいいよ。この腕輪はね、『赤金の腕輪』と言って前にやってもらった子供を作る実験を応用したのさ。で、その内容はと言うとね……やったほうが早いね。坂本、これを着けてみな」

雄二が言われた通り、左腕に着ける。ちなみに右腕には『白金の腕輪』が着けられていた。

すると学園長が召喚出来るように、部屋全体にフィールドを張った。

「召喚しな」

「よし、試獣召喚！」

例の幾何学的模様と共に雄二の召喚獣が現れた。

「まだ装備は変更されてないんですね」

「いちいち揚げ足を取るんじゃないよ。召喚大会と同時に変更する予定さね」

「……………待ち遠しい」

あれ？ ムツツリー二が装備に興味を持つなんて珍しいな。

「さあ、吉井も召喚しな」「あ、はい。試獣召喚！」

ポンツ、と音を立てて現れた僕の召喚獣。もうすぐこの木刀とも別れられるのかなあ？ いや、別れなきや困る。色々と。

「坂本は土屋の体に触ってコードを唱えるんだよ。コードは『交雑』」スクランブル

「了解つ。『交雑』……！」スクランブル

雄二がムツツリー二の肩に触れて叫んだ。すると雄二の召喚獣が光って、すぐにその光が消えた。

「あれ、なんか雰囲気かわったね？」

そこには黒い髪をツンツンに立てて、学ラン、小太刀を装備している雄二の召喚獣の姿があった。

「ふーん。これが雄二とムツツリー二の子供か」

「……………気持ち悪いから止めてくれ」

いつも僕のことを同性愛者扱いしてるんだから、このくらいの反撃は見逃してくれるだろう。

「なるほど、融合か」

「あのね坂本。融合なんてあまつちよろい抽象的で単純なものじゃないよ！ 本人たちのDNAを瞬時に計算して、遺伝子レベルで細かい交雑をおこなうシミュレーションなんだからね！」

自分の研究結果を一言で済まされたのが気に入らないのか、執拗に雄二を問い詰める学園長。まったく歳の割には子供っぽいなあ。

「で、これに何の意味があるんだ？」

「ふん、点数を見てみな」

『Bクラス 坂本雄二

+Cクラス 土屋康太

古典 231点+173点』

「戦闘力は二人の点数を合計したものなのか」

「それだけじゃないさね。まだこの腕輪の本領がお披露目されてないよ」

学園長が楽しそうに気持ち悪い笑みを浮かべている。……いやな予感。

「坂本、左手を広げて前に突きだしな」

「こっか？」

雄二が言われたように左腕を動かした。

「ああ。そのまま手を強く握ってみなよ」
「ふんっ！」

『……………加速っ！』

「……………へ？」
「……………」

問二十四（赤金）

『Fクラス 吉井明久
古典 0点』

なんでいつも僕はこんな損な役回りなのさっ！？

「これは……凄いな」
「……………俺の能力が」

君たち。ちょっとは僕の存在を気にかけてもいいんじゃないかね？

「わかってもらえたかい？ この腕輪は、交雑した相手の持つ腕輪の力を使用することが出来るんだよ。

ルールが細かいからこれを見な」

『赤金の腕輪発動条件

- ・交雑した召喚獣の合計点数が400点を越えていること
- ・使える能力は、交雑先の召喚獣の持っていたものに限る。腕輪側の召喚獣がもたら能力を持っていた場合、その能力は使えない。
- ・交雑先の召喚獣の能力が判明していなくても使用可能
- ・腕輪発動中は、交雑先の相手は召喚が出来ない
- ・能力は、左手を強く握ることで発動可能』

「なるほどな、こりや面白い。身を呈してまで実験に参加した意味があっただぜ」

実際酷い目に遭ったのは僕がメインだってことを忘れてるなコイツ。

「前に『ただの殴り合いじゃ戦争が地味すぎる』って誰かが言ってたからね。この腕輪を使えば、平均200点の科目で能力が使えるんだよ」

「そ、それって、僕のが使えるかもしれないってこと!？」

「……………そういうこと」

400点獲れなくても腕輪の能力が使えるのか……勉強嫌いの僕でさえ興奮しているのだから、勉強が得意な人は俄然やる気が出るだろう。

「今のところ、腕輪を使えるのは、土屋、工藤、姫路、それに霧島だけだろう? せっかくの試験召喚システムなんだから、派手にしてもらった方がPRにも繋がるんだよ」

去年も建前がどうかよく言う人だったけど、最近はそれが顕著になった気がするな。まあ、経営に無関心で他人に任しちゃうよりいいけど。

「それで、欠陥はどうなんだ? 俺たちを呼んだってことは、なにか問題があるんだろう?」

「……あんまり言いたかないんだけどね……実はこの腕輪、結構エネルギーの消費が激しくてね。一回使っただけでシステムに大きく負荷を掛けるのさ」

「調整はどうにかならないんですか?」

学園長が僕をジト目で見る。わかりきったことを言うな、と目が伝えてくる。

「やったよ。でもね、これだけの能力を腕輪サイズに仕舞い込むと、

どうしてもこれが限界なのさ」

「じゃあどうやって実用化まで持っていくつもりだ？」

雄二の質問に待ってましたとばかりに指をパチンと鳴らす学園長。乾いたいい音が部屋に響く。

「実はエネルギー消費を解決する方法を見つけたのさ」

「なんですか？」

「『白金の腕輪』のシステムを介すことで、エネルギーを格段に抑えられるんだよ」

「それで俺と明久が呼ばれたのか」

「……………俺は何故？」

「もうひとつ、エネルギーを抑える方法があつてね。どうしてもかは分かんないけども、単教科600点を獲れていれば、システムが円滑に機能するらしいんだよ」

このシステムって時々凄く適当だなあ……………。

「用件は分かった。だが、俺は明久とは組めないんだ」

「……………なんで？」

雄二は床にがつくりと膝をついた。

「……………翔子と組まなければ、俺の苗字が『霧島』になってしまうんだ」

世間はそれを婚姻と呼ぶ。

「事情はわかったよ。僕とムツツリー二で組むから」「……………（コクコク）」

「それじゃ、回収お願いするよ。ああ、それとも一つ。坂本と吉井は『白金の腕輪』を渡しな」
「ど、どうしてですか!？」

あれが無かったら大会で勝てるかどうか怪しくなるよ？

「もともとその腕輪には、一定の点数を獲ったら暴走するっていう欠陥があったろう？今のアンタたちの点数で暴走していないのが奇跡さね。任務遂行のためにも、メンテナンスと改良をしておくべきだろう?。」

成る程。そういうことならこっちも協力しよう。

「ちゃんと清涼祭の前には返してくれよ?。」

「確かに預かったよ。もう戻っても構わないさね」

学園長に言われ、僕ら三人が部屋を出た。

「それじゃ、雄二。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「ん?なんだ?」

「やだなあ雄二、もう忘れたの?」

あんなに大切な話を僕たちがスルーするはずがないじゃないかつ。

「……誰の苗字が『霧島』に変わるって?」

「……異端審問会は人の幸せを許さない」

その後、屋上で血まみれの雄二が見つかったという。

問二十五（開催）

「今年は美波と清水さんがいて助かったよ。あの二人の統率は貴重だね」

「全くじゃ。見事に雄二の代役を果たしておる」

清涼祭初日の朝。僕らの教室はいつもの小汚い畳と卓袱台をどかして、お洒落な喫茶店に姿を変えていた。

「このテーブルなんて、ラ・ペデイスから借りてきたんでしょ？
やっぱり立派だよな」

「あ、それは美春が持ってきてくれたのよ。お父さんも快く貸してくれたみたい」

そっか。あのバーサーカーも娘のために一肌脱いしてくれたのか。何だかんだ言っても父親なんだなあ。

「室内の装飾なら、Aクラスと同じくらい豪華なんじゃない？」

これはもう学園祭のレベルではないだろう。本格的に営業してもいいんじゃないだろうか。

「お姉様っ、お紅茶も完璧ですっ」
「きやつ」

いきなり後ろから飛び出してきた清水さん。気合いが入っているのか、既にメイド服風のエプロンドレスを身に付けている。

「あ、そうだ。清水さん、クレープを作ったんだけど、試食してくれる？」

そう言っ僕がクレープの乗ったお皿を差し出すと、なにかを警戒するように匂いを嗅ぎ始めた。別に悪いものは入ってないんだけど……。

「……薬品の類いは入っていなさそうですね」

「あはは、食べ物に薬品を入れる人なんているはずが――」

ない、と言いつうになっただけど、そう言っ人物を僕は知っている。

「ま、まあ清水よ。安心して食べるのじゃ」

姫路さんの手料理の恐ろしさを知っている秀吉がクレープを勧める。やっぱりあれは思い出たくないよね。

「……（パクッ）」

清水さんは警戒しながらも、フォークを上手に使って食べてくれた。

「……（モグモグ、ゴックン）」

「どうかな？　ちゃんと再現出来たか自信ないんだけど」

「……」

「えっと、清水さん？」

「美春？　どうかしたの？」

あんまり美味しくなかったのかな？　それとも中の果物が悪くなつてたとか？

「……（カチャ、スタスタ）」

「え？ 清水さん！？」

感想も言わずに行っちゃうなんて、僕のクレープはよっぽど不味かったのだろうか？

「合格、みたいじゃの」

「美春も素直じゃないわね」

「????」

よくわからないけど、クレープは食べられないものではないらしい。これでオープンは問題ないだろう。

「あれ？ ここに置いてあったクレープは？」

清水さんが置いて行ったクレープのお皿が見当たらない。おかしいな？

「吉井君、探しているのはこれかい？」

後ろから声がしたので振り返ってみると、そこにはギャルソンスタイルに前掛けのような黒のエプロンをつけた久保君が立っていた。その手にはさっきのクレープのお皿が。そうか、久保君も味見してくれたのか。

「あ、久保君。そのクレープどうだった？」

「凄く美味しいね。僕はあまり甘いものは食べないが、全然問題なく食べられたよ」

その言葉に偽りな無いようで、お皿の上のクレープは綺麗に姿を消していた。

「ありがとう。久保君も制服似合ってるよ」

久保君は雄二ほどじゃないけど背も高いし、なかなかハンサムだからギャルソンの格好はよく似合っている。

「ありがとうアッキー——吉井君」

何故か背中に悪寒が走った気がする。

「それじゃ、美波。これから召喚大会に行ってくるよ」

「あ、うん。行ってらっしゃい」

事前に交渉して、僕がいない間は美波と須川君が厨房を担当してくれることになっている。クレープは作り置きしているので、巻けば出せるように準備しておいた。

「頑張るのじゃぞ明久」

「うん！」

「頑張ってくれ吉井君」

「う、うん！」

誰かこの悪寒の正体をはっきりさせてほしい。

「あ、来た来た。おい、ムッツリーニ！」

特設ステージの下で待っていると、遠方から相方がやって来た。

「……………頑張ろう、明久」

「うん！ 絶対優勝しようね」

そういえば、ムッツリーニと正式にコンビを組んで戦ったことはない。試召戦争では役割が違っし、イベントでも二人でこなしたことは無かった気がする。

「ムッツリーニ、Ｃクラスの出し物って何？」

せっかくコンビを組むんだから、簡単なコミュニケーションくらいとつても構わないだろう。

「……………映画館」

「最前列を予約したい」

僕は財布から二千元を取り出してムッツリーニに突き出した。ムッツリーニの作る映画ならエロいものに違いない。

「……………すまない。脚本は別の奴が書いた」

僕の心拍数を返して欲しい。

「……………監督と編集は俺がやった。出来たら観て欲しい」

そう言ってチケットを二枚出すムッツリーニ。持つべきものは友人だ。

「うん、後で美波あたりと観に行くよ。僕らの喫茶店にも来てね」

「……………（コクコク）」

『それでは、Aブロック一回戦を始めます！！ 選手は入場してください！』

「それじゃ、行こうか」

「……………（コク）」

問二十六（緊急）

『はい、もしもし？』

「あつ、ババア長ですか？」

『その失礼な物言いは……吉井かい？ どうしたのさこんな時間に？』

「どうしたのじゃないですよ！ もうすぐ召喚大会が始まるっていうのに、白金の腕輪を受け取っていないんですけど！？」

『なんだい、それなら明日渡すよ。たった今調整が終わったとこさね』

「終わってるなら今下さいよ！ どこにいるんですかつ？」

『ロンドン』

「なんだロンドン——つてええっ！？」

『大きな声を出すんじゃないよ。最短時間で調整をするには、設備の良いロンドンの研究所でやるしかなかったんだ。明日の午前七時に渡すよ』

「そんな待てませんよ！ つてことは、決勝に行くまでは腕輪なし

で勝ち上がれってこと！？ アンタどんだけ無理な要求してるんだ！」

『物理的なもんなんだ、仕方ないだろう？ アタシはこれから仮眠をとるから、頑張りなよ？』

「畜生っ！ それなら延々と騒音を鳴らして邪魔してやるっ」

『やってもいいけどね……これ、国際電話だよ？ 携帯からかけているなら、電話代が馬鹿にならないと思うんだけどねえ』

「お休みなさい、学園長」

「えー。それでは、召喚大会一回戦を始めます」

現国担当の坂田先生が宣言する。当然勝負科目は現国となる。

「ああ……気が重いよ」

ババアが白金の腕輪の調整に遅れてしまい、腕輪なしで戦わなければいけないというのも原因だけど、本当の理由は、

「吉井！ 今日があんたの命日よ！ 覚悟してなさいっ！」

対戦相手が中林さんだということだ。

「代表、ちょっと落ち着きなさいよ？」

「なに言ってるのよ三上！ 吉井を目の前にして殺意が湧かないわけがないでしょ！？」

せめて敵意が湧いてくれる程度なら助かるんだけど。

「では、召喚してください」

「「試獣召喚っ！」」

幾何学模様が広がって、相手の召喚獣が呼び出される。

『Eクラス 中林宏美

&Eクラス 三上美子

現代国語 134点&129点』

「あれ？ 中林さん。装備が変わってくない？」

中林さんの召喚獣は、去年と同じくバット、キャッチャーミット、プロテクターという野球装備だった。特に何も変化がない。

「よく見なさい」

「？」

どこか変化しているのだろうか？

「ミットが古田モデルになったわ」

「雑魚だ！」

ハッ。しまった！ つい本音がっ！

「吉井クロス」

「代表！？ 目から赤い涙が流れてるよ！？」

ああもっ、怒らせちゃった。

「じゃあムツッリーニ、僕たちも」

「……………（コク）」

「試獣召喚！」

「……………試獣召喚っ！」

『Fクラス 吉井明久

& Cクラス 土屋康太

現代国語 119点&143点』

まばゆい光を放ち、魔方陣から現れたのは――

「なんでまた学ランに木刀なのさっ!？」

一貫して不良装備の僕の召喚獣だった。

「あーっはっは! 傑作! 傑作だわ!」

「もうっ笑わないでよ!」

あのババアめ。裏で手を回したな?

「……………猿飛佐助、と言ったところ」

対してムツッリーニは順当に向上したようだ。アニメなんかでよく見る忍者の格好をしている。

「なんでムツツリー二ばかりいい思いを……」

「……………明久、自分の召喚獣をよく見る」

「へ？」

学ランと木刀以外に変化しているのだろうか？

「……………木刀の柄の所に『洞爺湖』と彫ってある」「些細な変化だ！！」

しかもよりによって某少年マンガのオマージュー！？

「えー、そろそろ試合を開始して下さい」

坂田先生の催促もあり、僕は勝負を始めることにした。

「覚悟なさい吉井！」

中林さんの召喚獣がダッシュで僕の召喚獣へと向かってきた。手に持った金属バットが振り下ろされる。

「よつと」

「っ！ ちょこまかとっ」

だけど、去年混戦を切り抜けてきた僕たちにとっては、この程度なら相手にもならない。

「せいっ」

「きゃっ！？」

足払いを掛けると、中林さんの召喚獣は面白いようにスッ転んで

くれた。

あとは、

「いよいよおおっ！」

何度か木刀を振り下ろすだけだ。

『Eクラス 中林宏美

現代国語 0点』

「きゃっ！」

「……………勝負あり」

どうやら向こうも終わったようだ。

「えー。勝者、吉井・土屋ペア」

先生の気だるそうな声が会場に響いた。

「明久。試合で疲れてるところ申し訳ないが、急いで教室へ来てくれんかの？」

特設ステージから降りると、息を弾ませたようすの秀吉がやって来た。

「あれ？ 喫茶店で何かあったの？」

「うむ。少々面倒な客がおつての。すまぬが、話は歩きながらで頼む」

「あ、うん。了解」

先を急ぐ秀吉が続いた。ムツツリー二もついてきてくれるみたいだ。

「……………何があつた？」「うむ。営業妨害じゃ」
「今年も？ 誰が？」

秀吉が軽く唇を噛んだ。言いにくいことなのかな？

「……………あの常夏コンビが、一般客として来ておるのじゃ」
「ええっ!？」

なんで大学生になってまで邪魔をしてくるのさっ？

「今、島田と久保が対処しておるのじゃが、厄介なことなの……
増えとるのじゃ」

「はいっ？」
「……………何が？」

秀吉の精悍な顔が、まるで姉さんの荷物を無理矢理持たされた僕のような顔になっていた。

「『常夏カルテット』じゃ」

問二十七（常夏）

『おい、責任者呼べ！』

『俺のクレープのバナナが黒くなりかけだ！』

『ワタシのクレープ、クリームが少ないです』

『アイスマルクはまだッスか！？ 頼んでから八秒たってるッス！』

「あの連中じゃ」

「な、なるほど」

「……………確かにカルテット」

教室の外から様子を見てるんだけど……………中では常夏コンビと少女二人が理不尽な要求を繰り返していた。その横で美波と久保君がひたすら頭を下げている。清水さんは他のクラスメートを仕切ってたなんとか店を維持してくれていた。

「明久、一先ずお主が対応してくれ」

秀吉に背中を押されて教室に入る。

「おっ、吉井じゃねえか」「久しぶりに会う先輩に何か一言ないのか？」

常夏コンビがニヤニヤとこつちを見ている。

「アキ……………」

「大丈夫だよ、美波」

ここは責任者として、大人の対応を見せるべきだ。確か、坊主の先輩っていったら、

「頭にブラジャーを着けていた夏川先輩でしたよね」「ホントに失礼だぞ!？」

これがクレームか。

「あ、頭にブラジャーって……マジッスか？」

「流石に同調できないです」

仲間の女の子たちも懸念を示す。

「い、いや! 嘘に決まってるだろ?」

「全部このバカの出任せだつての!」

しどろもどろになって否定する常夏コンビ。やれやれ、否定すると逆に怪しくなるんですよ?

「ところで、お連れの女の子はどちら様ですか?」

「見てわかるだろ?」

僕は女の子たちに目を向けた。二人とも美少女と言えるくらい顔が整っていて、お揃いのメイド服を着てる。

さつきクリームについて文句を言っていた方は、身長がおそらく清水さんくらい。髪は黒く、セミロングという極めて一般的な髪型をしていた。

アイスマイルクについて何か言っていた方は、身長は清水さんよりも少し低い位だろうか。茶髪の巻き毛で、外ハネの髪が印象的だ。

ふむ、この情報から察するに

「彼女だとしたら先輩方はブサイクだから釣り合わないし」

「「んだとコラアッ!?!」」

あ、やばっ。また怒らせちゃったよ。

「あのな……コイツらは、俺たちの妹だ」

「ああ、妹さんね」

——って

「「「えええっ!?!?!?!」」」

教室中で僕と共感してくれる人が結構いるみたい。

「ちなみに、髪が黒い方が常村の妹で、茶髪が俺の妹だ」

「嘘だっ。ブサイクな常夏先輩たちの妹がこんな可愛いわけがない
っ」

「「表出る」」

「「……………そこまで」

「ムツツリーニ?」

振り返ると、一枚の写真とボイスレコーダーを持った親友が立っていた。

「ああ? 引っ込んでろ」「取り込み中だ。帰れ」

彼をあしらう常夏コンビ。でも、その判断は間違っている。何故

なら、

(ピラッ)

「……………これをネットにアップされなくなったら帰れ」

「うわあああつ！」

「おい、夏川！？ どこに行くんだ！」

彼は坊主先輩がゴスロリ服を着ていた写真を保持しているからだ。

「てめえ、相棒になんてことしやがる！？」

「……………アンタはこれを聞け」

(カチッ)

『常村という先輩はきらいじゃ！ 話もしとうない！』

「き、木下！？ すまねえ！ 悪さしねえから話を聞いてくれ！」

ボイスレコーダーに録音された秀吉の声を聞いたモヒカン先輩は、
凄い勢いで教室から出ていった。

「さてと、残るは」

「「ひっ！」「」

取り残された女の子たちは教室の隅で小さくなっていた。

「とりあえず君たち、話しようか？」

「ひっ！」

茶髪の女の子が怯えたようにこっちを見た。とても話を聞ける状態じゃない。

「明久よ。場所を変えてはどうかの？　ここじゃその子らが怯えて話にならんし、お客様の迷惑にもなる」　「吉井君、木下君の言う通りにしたほうがいい」

秀吉と久保君に言われたということは、それが正しいことなのだろう。

「うちたちでお店はなんとかするから行ってらっしゃい、アキ」
「ありがと、美波」

これじゃあ誰が代表かわかんないや。

「じゃ、二人とも付いてきて」
彼女らは怯えながらも、ゆっくりと立ち上がって歩き出した。

「となりのEクラスは、『スポーツ・カフェ』？」

中を覗くと、チアガール姿の店員と、色んなユニフォームを着た生徒が接客をしていた。

「へえ、面白いな。ちょっと入ってみようか」

『代表、大丈夫？』
『フフフ……吉井なんか……吉井なんか消えちゃえばいいのに……（ブツブツ）』

駄目だ、生死に関わる。

「ほ、他にしよう」

「えっと、Dクラスは『こすぶれ きつさ』？」
男子からしたら凄く魅力的だけど……。

『玉野さん……そのお姫様みたいなドレスは何？』

『あ、平賀君！ これはアキちゃんが来てくれたら是非着せたいと思つて！』

『本人の意思は関係ないんだね……』

駄目だ、社会的に死ぬ。

「ほ、他に行こうね」

Cクラスは、

『シンジ。この前は鈍器で襲いかかってゴメン。俺の愛を受け入れてもらえないと思つたら、ついカツとなつて……』

どうもまともじゃないし。

『さあ、坂本雄二くんは十六連勝中！ 彼にアームレスリングで勝てる猛者はいるんでしょうか！？』

「いるんでしょうか、じゃねえよ小山！ 俺がいないうちに勝手な

企画作りやがって！ 後で覚えてろ！？」

今なら砂漠の中でオアシスを探す人の気持ちがわかる気がする。

「結局Aクラスにお邪魔するしかないみたいだね。二人とも構わない？」

「は、はい」

Aクラスならまともな経営をしているだろう。
綺麗に修飾されたドアを開けて中に入った。

「いらっ……明久君？」

問二十八（再会）

「あ、姫路さ……ん？」

店に入った僕たちを出迎えてくれたのは、驚くことに去年クラスメートだった姫路さんだった。彼女は綺麗なフリルのついたドレスを着ていて、そうなんかこう、一段と……とても、輝いて見えた。

「お、お久しぶりです明久君——じゃなくて、いらっしやいませご主人様、お嬢様」

久々の再会に素に戻ったみたいだけど、立場を思い出して接客に移る姫路さん。やや天然なところはAクラスに入っても変わらないようだ。

「ところで、そちらの可愛いらしい女の子たちはどなたですか？メイド服がとても似合ってますけど」

どうしよう。姫路さんの背後からどす黒いオーラが見える。

「こ、この二人は常夏先輩たちの妹さんだよ」

「へえ、あの先輩方にこんな可愛い妹さんがいらっしやったんですね」

一瞬でオーラが消えた。僕にとっては驚愕の事実だけど、姫路さんにとってはちょっと意外なことの一つらしい。

「では、お席の方へご案内します」

姫路さんに連れられて、窓際のテーブルに着席する。

「ご注文が決まりましたら、スタッフをお呼びください」

「ありがとうございます。お仕事頑張ってくださいね」

「はい、ゆつくりしていただくさいね、明久君」

姫路さんはペコリとお辞儀をしてトコトコと業務に戻っていった。
うん、なんだかとても安心したよ。

「じゃあ、何か頼もうか。えっと――」

目の前の女の子たちに話しかけて気づく。そういやこの子たちの名前すら聞いてなかったよ。

僕の言いたいことが伝わったのか、セミロングの女の子――モヒカン先輩の妹さんがおずおずと手を上げた。

「ワ、ワタシ、二年Ａクラスの常村越美と言います。に、兄さん――じゃなくて、兄と一緒に大変失礼なことをしてかしまして、すみませんでした」

「ア、アタシも同じく二年Ａクラスの夏川冬美ツス！ 兄貴の分も謝りますから、吉井先輩、ここはどうかご勘弁くださいツス！」

モヒカン先輩の妹さんに続いて、坊主先輩の妹さんも立ち上がって謝罪してきた。ひとまずこの子たちのことは『越冬コンビ』とくくっておこう。まあ、二人の気持ちはよく伝わって来たんだけど、周りのお客さんから見られてすっかり注目の的だ。

「気持ちはわかったから頭を下げてくださいかな？ これじゃお店に迷惑がかかっちゃうよ」

「す、すみません」

「失礼しまッス」

二人はまるで面接を受けているかのように緊張している。なにをそこまで怖がっているのだろうか。

「すみませーん。注文いいですか？」

「はい、なにがいいですか明久君」

呼んでから間もないのにすぐに飛んできた姫路さん。まるで僕が注文をとるのを待ち構えていたみたいだ。

「シフォンケーキを二つ、アールグレイを二つ、塩水を一つくれるかな？」

「厨房の方はメニューを聞いただけで明久君が来たって解っちゃいますよ？」

「そっか、じゃあ砂糖水に変更出来るかな？」

「そういう問題じゃないと思いますけど……」

なんだかよく分からないけど、注文をとった姫路さんが厨房へいったところを見ると問題ないようだ。

「よ、吉井先輩。勘弁してください」

「ケーキ代も払うツスから……」

「ねえ二人とも。そんなに怖がらなくてもいいよ？　ただ、なんで僕たちのお店の邪魔をしたのか聞きたかっただけだから」

「へっ？」

二人はかなり面食らっている様子であった。何か僕に危害を加えられるとも思ったのだろうか。

「ワ、ワタシたちの服に興味があつたんじゃないんですか？」

「てつきりそのために連れてこられたと思つたんですけど……杞憂でしたか」

「服？ そのメイド服がどうかしたの？」

「……ワタシたち、兄さんたちから聞いたんですけど……」

「吉井先輩は『他人のメイド服を無理矢理脱がせて着るのが趣味だ』つて」

「つて僕はそんな変態じみた趣味は持ち合わせてなんかいな「本当ですか明久君！？」いに決まつてるでしょ姫路さんまで！！」

頼んだ品を運んできたものを落とさんばかりに驚いている元クラスメイト。

それより初対面の後輩にまでそんなふうに使われてるなんて……僕の社会的な立場つてどうなってるんだろう？

「（スチャ）んー、多分それはあの先輩たちが情報を捏造したんだろうね。吉井君は変態だけど、流石にそこまでエッチじゃないよ」
「工藤さん、いきなりの登場でフオローはともありがたいけど僕の前提条件は変態なの！？」

相も変わらず神出鬼没な人だ。油断もスキもありやしないよ。

「でも、去年の清涼祭ではメイド服を着て兄貴たちを学校中追い回したとも聞きましたよ？」

どうしよう。それに関しては事実しか含まれていない。

「なんで否定しないんですか明久君！　そこまで汚れてたんですか！？」

「待つて姫路さん！ 工藤さんみたくフォローしてくれとは言わないから、せめてこれ以上悪い風評を広げる真似だけはやめてくださいマジで！！」

女装した変態って肩書きでさえ嫌なのに、男の先輩を追いかけて回したなんて噂が駆け巡ったら僕の社会的な命は無いも同然だ。

「（プルルルル、ガチャ）あ、美波ちゃんですか？ ちょっと、明久君のことで話したいことがあるんですけど……」

「待つんだ姫路さん！ 再会からまだ10分も経ってないのに僕との溝を深める行為に走らないで！」

「……賑やかッスね……」

案外これが大人しい方だったりする。

問二十九（不穩）

ひとまず姫路さんと工藤さんには席を離れてもらった。

「そ、それで、君たちが邪魔をしてきたのはなんで？」

本題に入ると、坊主先輩の妹は、首をひねって考える仕草をした。

「うーん……アタシらはただ兄貴たちに『吉井と坂本に痛い目を見せてやりたいからついてこい』って言われただけツスよ。店に入ったらとにかくクレームつけてればいいって」

「あとこれは偶然ですけど、召喚大会にも出るように言われました。もともとエントリーはしていたんですけど」

「召喚大会に？」

直接やりあえないから妹に頼むなんて、あの二人は何を考えてるんだろう。

「はい、優勝賞品の『プレミアムチケット』が欲しくて。無料で如月ハイランドに行けるなんてチャンスは滅多にないですからね」

「言っときますけど、吉井先輩に負ける気はさらさらないツスよ？ うまく行けば準決勝で当たるそうツスから」

大方、後輩の女子に負ける姿を晒したいだけだろう。なんで大学生になってもやることに変わりがいいのかね。

「僕も負ける気はないよ。お互い頑張ろうねっ」

後輩とはいえ、Aクラスのコンビだ。負ける可能性がある以上、手加減して負けるほど僕は甘くない。

「……………」

「二人とも、どうかした？」

「いえ、なんだか兄さんたちに聞いたような人とは全然違うなって」「去年もバカで変態の問題児だって、後輩の中で有名だったツスよ」「いや、だいたいその通りだと思うよ？ 去年からあんまり変わってないから」

事実、僕はそう言われてもおかしくないだけの問題を起こしている。決して噂だけが独り歩きしている訳じゃないだろう。

「ふふっ、なんだか安心しました」

「それじゃ、アタシらBクラスの坂本さんって人にも会ってきます」

本当にあの意地汚い先輩たちの妹なのかと疑いたくないくらい、純粹な笑みを浮かべて二人は席をたった。

これからあの二人は、アームレスリングのせいで汗だくのゴリラと会っのだろうかと思うと不安になる。そんなことを考えていると、いつの間にか二人の姿は見えなくなっていた。

「じゃ、僕は召喚大会にいこうかな」

「あはは、吉井君。忘れ物忘れ物」

気がつくとい藤さん、姫路さん、それに霧島さんの三人に囲まれていた。

「……………あの二人が食べたシフォンケーキのお金、貰ってない」

「っ、常村さん！ 夏川さん！ 僕奢るなんて一言も言っていないよ」

「！？」

もともと奢るつもりではあったけど……何か一言くらいあってもいいんじゃないかなあ……？

「はい、二千円確かに頂戴しました」

「姫路さん……知り合いのよしみなんだからツケにしてくれても良かったんじゃない？」

「明久君はおバカさんですから、お金のことを忘れてどこかへ行っちゃうつてことくらいは予想つきますよ」

うん、あながち外れてはいない。

「あの、明久君。ちょっといいですか？」

姫路さんが改まった様子でこちらを向いた。

「クラスが離れちゃいましたよね？　わ、私と別のクラスになって、寂しくないですか？」

クラスが離れて姫路さんと会う機会も減ってしまった。それは事実だけど、

「寂しくない、って言ったら嘘になるけど、姫路さんがふさわしいクラスに入ってくれたからそれで満足だよ」

僕の本来の願いが達成されたんだ。それ以上のことは望んだらバチが当たるよ。

（そこは素直に寂しいって言ってあげたほうが良かったのにね）
（……吉井は鈍感）

なんだろう。影で工藤さんと霧島さんがぼそぼそ言っている気がする。

「そ、それじゃあ召喚大会頑張ってくださいね。私応援してますからね！」

「うん、ありがとう姫路さん」

やっぱり姫路さんの笑顔って癒されるなあ。元気が湧いてくるってこういうことなんだろう。

「吉井君、ちょっといいカナ？」

向こうで工藤さんが手招きをしていた。

「何？ 工藤さん」

「あの、根本君のことなんだけど」

根本君？ そういえば姿が見えない。

「どういう風の吹き回しか知らないけど、優子と組んで召喚大会に出てるんだよ」

「はいつ？」

確か、工藤さんはあの二人は合わないそうって言ってたのに。

「ムッツリー二君と坂本君にはもう教えたけど……気をつけてね。」

絶対になにかウラがあるから」

「わかった。情報ありがとう」

根本君が木下さんと組んでる。これは嫌な予感しかない。難しいことは雄二に任せるとして、僕は目の前の召喚大会に集中しよう。

「アキちゃん！ この勝負に私が勝ったら、このドレスを着てね！
絶対可愛いから！」

「絶対負けられない！ 全力で協力してねムツツリー二！」

「……………写真撮影は任せろ」

「違うよムツツリー二！ 僕が頼んだのは玉野さん側への援助じゃないよ！？」

「ドレスだけじゃダメならウィッグもつけてあげるから！」

「違うんだ玉野さん！ 僕は女装のオプションが不満なんじゃなくて女装そのものが不満なんだ！」

「そんなことはどうでもいい！ 三上さんをボコにして恥をかかせた奴らは許さない！」

「待つて平賀君！ ボコにしたのはこのムツツリスケベであって僕は手を下してないよ！」

「……………エロになんか興味はない」

「そんなみえすいた嘘つかないでよ！！」

「では、試合を始めてください」

竹中先生の宣告が酷く理不尽に思えた。

問三十（百合）

「ただいまっ、美波。二回戦勝ったよ！」

「あ、お帰りなさいア……キ……？」

「お店の調子はどう？ あれから邪魔とかはないのかな？」

「ええ……美春たちも頑張ってくれてるから、特に問題は起きてないわよ……？」

「それなら良かった。三回戦まであんまり時間ないけど出来る限り手伝うよ」

「うん、助かるんだけど……アキ」

「あはは……何？」

「……どうしてそんなに綺麗なドレスを着てるのかしら？」

「……玉野さんに『せめて三回戦が始まるまで着て！ さもないと今まで撮り貯めたアキちゃん秘蔵コレクションをネットを通じて皆に見せるから！』って言われて……」

「天命だと思つて受け入れなさい」

「貴女はこの期に及んで女装を受け入れると！？ 女神のお告げにしては冷酷すぎるんじゃない！？」

「帰つてそうそうなにを騒いでおるのじゃ明ひ……さ……？」

このあと同じような会話が四回くらい繰り返された。久保君だけは「普段の格好のほうが似合っているよ」って言うてくれたけど……普通の服より女装が似合う男子って考えものなんじゃないかな。

「そつだ。アキ、今年も葉月が手伝いに来てくれるそうよ」

「あ、それは助かるね」

葉月ちゃんは可愛くて愛想もいいし、なにより美波の負担を減らせるのは大きい。昼時の忙しい時間だけでも手伝ってくれるなら大助かりだ。

『バカなお兄ちゃん。どこにいますかあ?』

女装姿でウエイトレス(?)の手伝いをしていたら、早速葉月ちゃんの声が聞こえてきた。

「明久、仕事を忘れるでないぞ?」

「わかってるよ。葉月ちゃん。こっちこっち」

業務をこなしつつ、教室の中から声で誘導する。

「お客様がいらっしゃるのというのに大声出すんじゃない。全然これだからブタ野郎は……」

「あ、いたです! 女装したバカなお兄ちゃん」

(シュパッ)

「「んんんっ!?!」」

え!? 今なにか光が見えなかった!? 光の速さで縦ロールの女の子が葉月ちゃんを浚っていかなかった!?

『は、離してくださいですっ』

『ハッ!? 美春としたことが、可愛い可愛い天使に不埒な真似をしてしまうなんてっ! 今お姉様のところまでご案内しますねっ』

『その前にほっぺをすりすりするのを止めてほしいです……』

「前途多難、じゃな……」

「こんにちは、葉月ちゃん。久しぶりだね？」

「は、はい。お久しぶりです」

振り分け試験のために多忙だったせいで、葉月ちゃんとも久々の再会ということになる。もちろん、現段階で清水さんは葉月ちゃんから遠ざけてある。葉月ちゃんもちょっとしたトラウマになったのか、清水さんの声が聞こえる度に小刻みに震えている。

「そういえば葉月ちゃんは六年生になったんだよね？ もう大人みたいなものだね」

「大人みたい、じゃなくて大人なんですっ。葉月、もう子供じゃありませんっ！」

そう言って胸を反らす小学生。お年頃なのか、去年からの見栄をはる癖は治っていないようだ。どれ、ちょっとだけ乗ってあげようかな？

「へえ、じゃあ葉月ちゃんはどこが大人になったのかな？」

「決まってるです！」

両手を上に上げて万歳のポーズをする葉月ちゃん。あはは、ムキになって可愛いなあ。

「葉月、六年生になって、おっぱいがおっきくなってきましたです！」

なぜだろう。美波の背中から強い哀愁を感じる。

「……………詳しく聞かせてくれ」

「ムツッリーニ！？　なんで君がここにいるのさ！　クラスもメンバーも違うのにっ」

「……………おれの嗅覚をなめるな」

去年同様なぜかカツコ悪い。

でも、僕にはそれなんかより、もっと大事なものが。

「…………アキ？　妹に欲情されたなんてたまないから……………ね？　大人しく、ばつきり終わらせるわよ？」

そこは「ばつきり」じゃなくて「ゆつくり」のほうだ。ダメージがなくて助かるんだけど、胸に関連した美波の破壊力は背中越しにもヤバイと感じ、苦笑いするしかなかった。

問三十一（前哨）

「明久よ。そろそろ三回戦の時間ではないか？」

「うん？ あ、もうそんな時間なんだね」

「早く行きなさいよアキ。もうすぐお昼だから混んじゃうわよ」

「ありがと、じゃあ行つてきます」

さて、行く前にトイレで制服に着替えるとするかな。

「あれ、久保君。どうしたの？」

「いや、僕もトイレに行こうと思ってね。失礼ながら同行させてもらうよ」

「う、うん」

なんだか久保君の言葉の裏に強い意思を感じる。でも真面目な久保君に限って変な下心とかはあるはず無いし、気にする必要も無いのか。

「待つのじゃ明久。ワシもついていくのじゃ」

「ひ、秀吉は来ちゃダメだよ！ 秀吉が男子トイレに来た日には警察が乗り込んできちゃうから！」

しかも捕まっちゃうのは僕のほうかもしれない。

「なぜじゃ！ ワシは友の貞操を守ろうとしておるだけじゃろつが！」

「ぼ、僕の貞操！？ 止めてよ秀吉！ 物事には順序つてものがあるじゃないか！ 僕たちまだ一緒にお風呂にも入ってないよ！？」

「待つんじゃないか！ お主話が色々飛躍しておるぞ！？」

「とにかく、秀吉はちゃんと秀吉用トイレに行かなきゃダメだよ！」
「そうよ木下、アキと一緒にトイレに行くなんて真似は許さないんだから」

「その台詞通りならなぜ僕に対して関節技を繰り出してくるのさ骨が軋むうつつ！！」

最近は何多に暴力を振らないと安心してたらこれだ。まったく美波に隙を見せたらろくな目に会わない。

「痛たた……あれ、久保君。先にトイレに行っても良かったのに」

美波の関節技から解放されて落ち着いてみたら、トイレに行きたくはなしの久保君が待つていてくれた。

「いや、大切なクラスメイトを残して行けはしないよ」

久保君が眼鏡を押し上げながら、そんなカッコいい台詞を言った。その目的の場所がトイレじゃなかったら本当にカッコいいのだろうけど。

「ありがとう久保君。久保君ってやっぱり優しいんだね」

「礼には及ばないよ」

久保君は遠慮するけど、雄二なら待つどころかさつさとトイレに行ってしまうだろう。最悪の場合、僕が虐げられている様子をムツツリー二あたりに撮らせて見せびらかすことも予想される。

「むう……何か釈然とせんのじゃが」

なぜかその後の秀吉は終始不機嫌だった。

結局、トイレは混んでいたので隣の空き教室で着替える事にした。着替えを久保君が手伝おうとして秀吉がそれを全力で止めてくれたけど……秀吉はどうしてそんなに久保君の邪魔をするんだろう？

着替えを終えて大会会場に着くと、ステージ下で待っているはずのムッツリーニが居なかった。前の二回ともいたのに、なにかあったのかな？

「……………お待たせ」

「おわっ！」

背後から声がしたのでびっくりしたけど、案の定そこには悪友のスケベが一名。

「ムッツリーニどうしたのさ？ いつもこのステージ下で女の子の脚を撮影してたじゃないか？」

「……………女の脚なんかに興味はない」

今更ながら、彼の言葉に説得力はない。

「……………クラスの出し物を手伝ってた」

「あの変な映画、見に来る人いるんだ……」

たしか、タイトルは『伝説の桜の木の下で貴様を待つ！』だった。

「……………いる。Dクラスの玉野とか、秀吉のお姉さんとか」

はてな？ その二人に共通するものなんてあったっけ？

「……………行くぞ明久。三回戦からは公開試合」

ムツツリーニそう言ってステージへの階段を登る。

「……………あれ？ Cクラスって映画なんだから映像を上映する以外に手伝うことなんかあったっけ……………？」

色々引っ掛かるけど、そんなことを考えている暇はない。だって、

「……………明久。相手にとって不足なし」

「ああ。本気で行くよ。アイツには」

僕らの次の対戦相手は――

「いよう。明久、ムツツリーニ。やっと会えたな」

「……………雄二、全力でいこう」

あの『バカ』なんだから。

問三十二（奇襲）

『さあ！ お待たせいたしました。ただいまから、試験召喚大会の公開試合を行います！！』

司会役である放送部員の女子生徒が観客を煽っている。毎度の事ながらこの試験召喚システムへの関心は強いらしく、お昼時だというのに沢山のお客で一杯だった。

「明久。こんな大勢の観客の前で恥を晒すなんて真似をさせてしまっ
うだろうが、悪く思うなよ？ これも勝負なんだ」

「言ってくれるね、雄二。一瞬で片付けてはやくアームレスリング
に専念出来るようにしてあげるよ」

まさか三回戦の相手がコイツだなんて思いもしなかったよ。早く
決着がつけられるからこれはこれで好都合だけど。

「それにしても、ババアは変なことをするもんだね。腕輪を回収し
なきゃいけない僕ら同士を戦わせるなんて」

「なんでも『いきなり昨年の優勝者同士の対決が観戦できる』なん
て触れ込みで宣伝しまくったらしい。その方が来客数が増えるだろ
うからな」

「ふーん。ババアも風評に気を遣ってるね」

とはいえ、いきなりこんなに多くの観客の前で試合をするとは思
わなかった。無意識に手が震えてしまう。

『では、試合を開始します。選手は召喚してください』

「さあて、本気で行くぞ明久、ムッツリーニ！ 試獣召喚っ！」

「……手加減はしない。試獣召喚」

「それは僕らだって同じだよっ！ 試獣召喚！」

「……………試獣召喚」

会場のフィールドに幾何学模様が広がり、四人の召喚獣が呼び出された。

そこには僕らの試獣召喚の他に、日本刀を携えて凜と構える霧島さんの召喚獣の姿と、

「……………雄二も変わり無いんだね」

相変わらず白ラン不良装備から変更のない雄二の召喚獣が立っていた。

「バカが、よく見る。武器が変わっているだろう？」

「武器？」

雄二の召喚獣の武器はメリケンサック、木の棒ときて

「鉄パイプになった」

「ざ、雑魚だ！ 雑魚がいる！」

でも金属製になっただけ木刀よりマシなのかもしれない。強いかどうかはともかくとして。

『両者出揃いました。立会人の先生は大島先生ですので対戦科目は保健体育。点数を表示します』

『Fクラス 吉井明久

&Cクラス 土屋康太

保健体育 92点&642点

Bクラス 坂本雄二

&Aクラス 霧島翔子

保健体育 211点&404点』

先生のコールとともに僕らの点数が巨大ディスプレイに表示される。幸いにも保健体育だからムツツリー二の点数は霧島さんを上回っている。

だけど、そこは流石霧島さん。受験科目でない保健体育だからって手を抜いていない。

「翔子、わかってるよな？」

「……うん、例の作戦でいく」

雄二と霧島さんが打ち合わせを始めた。雄二のことだ、僕らを倒す策を何通りも考えているんだろう。でもそのくらいなら予想済みだ。

「僕は雄二をやる。ムツツリー二は霧島さんをお願い」

「……………まかせろ」

「では、試合、開始！」

先生の宣言と同時にゴングがけたたましく鳴った。

「行くよ雄二！ 先手必しよ」

って目の前にいきなり回転して襲ってくる鉄パイプが！？
くそっ、避けきれない！？木刀で弾くしかっ！

「い、いきなり危なっ」

「……吉井。余所見は禁物」

鉄パイプを弾いて体勢を整え直すと、目の前に霧島さんの召喚獣の姿があった。

『なんとという奇襲でしょうか！ 坂本君が武器である鉄パイプを吉井君に投げつけ、注意を反らす間に霧島さんが接近していました！』

「……まずは、一人目」

「う、嘘っ！？」

畜生油断し――

「……………加速」

た……………？

「ム、ムツツリーニ！」

防御体勢をとっていた僕の召喚獣の前には、小太刀で日本刀を防ぐ相方の召喚獣の姿があった。

「ありがとう、霧島さんは任せたよ！」

結果的にムツツリーニは霧島さんと相対できた。これで僕が雄二と対戦すれば問題ないっ。

「掛かったな明久っ!!」

「はっ!?!」

フィールドを見回して見ると、僕の召喚獣の背後には雄二の召喚獣がいた。

「これが俺の作戦だ」

手には拾った鉄パイプを持っていた。

問三十三（相棒）

『なんということでしょうっ！ 坂本君の召喚獣は投げた鉄パイプを既に拾っていました！ しかも霧島さんと共に吉井君と土屋君を挟む体勢！ 吉井・土屋コンビは俄然不利な状況でありますっ！』

「覚悟はいいか明久！！」

雄二の召喚獣が突進するために力を蓄えた。一撃で勝負を決めるためだろう。でも、それは単調な動きだ。僕の実作技術があれば受け流すことも十二分に可能なんだけど、

「……………明久、今は霧島で手一杯」

「くっ、だよな」

僕の召喚獣の後ろには戦闘に集中しているムツツリー二と霧島さんの召喚獣がいた。避けたらいくらムツツリー二の召喚獣でもかなりのダメージを負ってしまうだろう。

「ふはははは！ 行くぞ明久あつ！」

色々と作戦を考えているうちに、準備を終えた雄二の召喚獣が突進してきた。

「くそっ Aクラス級の突進なんて、僕の召喚獣でどうすれば――」

「あ、何か今匿名の情報が――ってええっ！？」

突然アナウンスの女子生徒が取り乱したように叫んだ。

『さ、坂本君と霧島さんは、この大会が終わり次第市役所に向かって婚姻届を提出するそうですっ！』

「……………は？」

緊迫した戦闘中にはまったく相応しくないアナウンスに一瞬意識がそれてしまった。

「……………雄二……………嬉しい」

「待て翔子！ 今は試合に集中しろっ！」

アナウンスに惚けて意識が飛んでいる霧島さんとは対称的に、雄二は試合に意識を戻した。ものすごい勢いで僕の召喚獣へと突っ込んでくる。

「くたばれえっ！！」

目と鼻の先の距離まで雄二の召喚獣が近寄ってきた。

「今だ！ ムツツリー二、腕輪を！」

「……………捕まってる、加速っ！」

本来、召喚獣の腕輪は攻撃のために使用する。だけど、今使った腕輪の能力は攻撃なんかじゃなく、

「畜生っ、避けるっ翔子おっ！！」

僕の召喚獣ごと避けて、勢いのつきすぎた雄二の攻撃を霧島さんに当てるためだ。

『Aクラス 霧島翔子
保健体育 0点』

「畜生……挟み撃ちをかわすとは思わなかったぜ」

向こうでは雄二が頂垂れていた。策士策に溺れる、という表現がピッタリくる。

「こうなったら、サシで勝負してみるか」

それはやけくそなのか、はたまた秘策の一石なのか、僕にはわからないけど、

「来いっ雄二！」

「おらああっ！！！」

正面から受け止めて、きっちり返り討ちにしておくくらいはしておこう。

『Bクラス 坂本雄二
保健体育 0点』

「さすがに……操作技術じゃ勝てねえか」

『勝者、吉井・土屋ペア！』

ひとまず……一個くらい山は越えたかな？

「え？ 僕らの四回戦は中止なの？」

雄二との試合が終わった直後、アナウンスを勤めていた女子生徒――新野さんから聞いた話だ。

「そうよ。Aブロック最後の試合なのに、選手が食中毒になっちゃったらしいの」

その食中毒の原因が姫路さんの手料理じゃないことを祈りたい。

「そうだ。あの匿名の情報、だれが持ってきたのさ？」

「それこそ匿名よ。気づいたら手元に例の情報が書かれた紙があったの」

なんだか強く違和感の残る出来事だった。出てきたタイミングといい、あれは僕たちを助けようとしたとは思えない。

「あ、土屋君つ。例の写真、頼んだからね」

「……………（こくり）」

「????」

「それじゃ、私次の試合も実況しなきゃ。土屋君たち頑張ってね」
「ああうん、頑張るよ」

手を軽く振りながら新野さんは走って放送席へ行った。はて、「土屋君たち」って……基本的に前に出たのは僕だった気がしたんだ

けど？

「ムツツリー二、新野さんと知り合い？」

「……………ただのクラスメート」

「じゃあ、例の写真っていうのは？」

「……………ただの潜在写真。ディスプレイに映すらしい」

「潜在写真？ それならわざわざムツツリー二に頼む仕事でもないんじゃない？」

「……………そんなことはない（パラッ）」

「あれ、ムツツリー二。なにか落ちたよ？」

優しく拾ってみると、それは写真だった。写っていたのは――さっきのドレス姿の僕。

「……………明久、早く返してくれ」

「返すわけないよこんなもの！ っていうか新野さんはこれをどう使う気だったのさ！？」

「……………応援用の団扇とか？」

「それって世界中から来てるお客さんから変態だと思われちゃうじゃないか！？」

「……………メジャーデビュー」

「いやそれ意味が違うからっ！！」

問三十三（相棒）（後書き）

初投稿からはや1カ月経過しました。ここまで続けられたのも、読者の皆様のお陰です。m（――）m

今回、1カ月毎日連続投稿記念として、『キャラクターの設定を皆さんに考えていただく』という企画を行いたいと思います。（ハ
ーハヾ

今回考えて頂きたいキャラクターは――『久保良光』

ええそうですよ。久保君の弟です。

『常夏の妹たち（完全オリキャラ）も出したし、せっかく久保君も明久と同じクラスになったんだから弟くん出そう』

という作者の思惑でしたが、対象となった久保良光君は原作六巻のおまけコーナーに、しかも名前だけしか出ていません。（；A、）

W i k i p e d i aを見て『文月学園の生徒（学年不詳）』としか書いてません。

せっかくなので、皆さんに謎である良光君の設定を加えていただくと思います！僕ではクラスも成績も外見も性格も全然決まりません、てか決められません！

【注意・以下の設定を守ってください】

1、二年生（利光とは一歳差）

2、兄が同性愛に目覚めたことは知っている。

締め切りは登場するまで！（次の合宿編では出ないので、約1カ月後）

アイデアは感想欄かメッセージでお願いします。

問三十四（暗雲）

「四回戦はなしか……どうしよう？ 時間が余っちゃったよ」

本来なら公開試合が始まったら連戦連戦って感じでトイレに行く程度の時間しかないんだけど、四回戦が無くなるとなったら話は別だ。店を手伝えるほど時間も余ってないし、トイレかどこかで時間を潰すには少々長い。

「おい、暇してるのか？ Fクラスの代表のくせに、島田に全部任せっきりじゃないか」

うん、こういうタイミングで悪態をつく人間は一人しかいないよね。

「雄二こそ、まんまと小山さんに踊らされてたじゃないか。ホントに異性を相手にするとダメダメだね」

「ちっ、痛いところ突いてきやがる」

そう言つと雄二はポリポリと頬をかいた。

「ところで明久。俺が負けちまったわけだからお前が優勝するしかババアとの約束を果たす方法が無くなったわけだが、勝つ自信はあるのか？」

「うーん、正直相手次第だね」

「そうになると、次に当たるのは……順当なら越冬コンビだな」

「そうか、あの二人順調に勝ち上がったんだ」

それにしても、雄二もあの二人に『越冬コンビ』って呼んでたなんて驚きだ。

「うん？ ああそうか。お前もあの二人と面識があるのか」

「うん。最初は常夏コンビと一緒に嫌がらせしていたけど、兄に似ないで性格のいい子たちだったよ」

「まったくだな。顔立ちも整ってたし、ホントにあの先輩たちの妹かと疑ったぜ」

「それにしても、ホントにあの先輩たちの妹かな？ 聞き分けもいいし、同じ兄妹だとは思えないんだけど」

「奇遇だな。俺もまったく同じことを考えてたぜ。Bクラスに入ってくるなり丁寧に挨拶して、出し物のアームレスリングにもちゃんと参加してくれたんだ。気持ちのいい後輩だった」

「本当にあの常夏コンビと血が繋がっているのかな？」

「いや、義理の妹かもしれない」

「あの先輩たちってシスコンなんだろうね」

「ああ、あの子たちが不憫だ」

「お前らうるせえんだよ！！」

あ、噂をしたら来ちゃった。

「お久しぶりですね常夏変態」

「もういろんなものを通り越して失礼だろ！」

どこも間違っではないと思うんだけど。

「ふん、お前が妹たちにぼこぼこにされるのを観に来たのさ」

「せいぜい祭りを楽しめよっ！」

それだけ言っただけで常夏コンビはどこかへ去っていった。

「雄二……」

「なんだ……？」

「あの二人、負け犬つぷりに磨きがかかってるね……」

「……それは言っつなよ。流石にそれは虚しすぎる」

あの二人は嫌いだけど、あんな兄をもつ妹が可哀想だ。

「そういえば雄二。越冬コンビがBクラスに来たんだよね？」

「ああ、そうだが？」

「で、あの二人は雄二とアームレスリングで対決したと？」

「？ 何が言いたいんだ？」

ここまで言っつてわからないってことは、こいつはまだ学習が足りないようだ。

「つまり、雄二は後輩の女の子二人と手を繋いだってことだよな」

「……吉井、教えてくれてありがとう」

『さあ、四回戦も残すところあと一試合です！ 準決勝で吉井・土屋ペアと戦うのはどのペアなのか！』

「あ、そろそろ試合だね。僕は会場にむかうよ」

「待て明久。学園祭で死人がでてもいいのか？」

「……大丈夫。何十本か骨が折れるだけだから」

「待て翔子。折る骨の桁が違^{ボキッ}……う（ボキッ）……ぞ（バキボキッ）

……」

いくら僕が慣れていてもグロい光景はなるべく見たくない。さっさと退散しよう。

「あ、無理。これ死んだわ」

坂本雄二の遺言は極めて冷静だった。

「……………」

「美春？ そんなとこでなにをしてるの？」

「おっ、お姉様……………」

「まったく、アンタのせいで葉月がビクついちゃってるじゃない」

「す、すみませんっ。あまりにも可愛らしくてまるで天使のようでしたのでっ」

「言い訳無用。で、仕事サボってなにしてるわけ？」

「盗聴です」

「……………恥ずかしげもなく言えるアンタの精神を疑うわよ」

「お姉様、聞いてください。美春は大変なものを聞いてしまったのですっ」

「まったくなによ？ このイヤホンをつければいいわけ？」

【「そうか……………Fクラスの勝利、ね」

『……………どんな感じ？』「まあまあ予想通り、ってとこかね」】

「？ この声は誰？ どこかで聞いたような……………」

【『……………それはよかった』

「おいおい。この根本恭二と組んでるんだから、もう少しテンション上げろよ」】

「ね、根本！？ 道理で聞いた声だと思った！」

「お姉様、重要なのはこのあとですっ」

【『……………上げられるわけがない』

「そっだな、お前は脅迫される立場だもんな——」
『ムツツリー
二』『』】

「……………っ、土屋？」

問三十五（干渉）

「ど、どういふことなのよ美春。土屋と根本が手を組んでるって…
…本当？」

「落ち着いてくださいお姉様っ。『脅迫』という単語が出たので、
おそらく土屋康太は根本に脅されているのかと」

「脅されている？ そういえば確かに元気が無かったわね……」

「なにをしておるのじゃ島田、清水。もう昼も過ぎて大会も大詰め
じゃから一旦店を閉めるぞ？」

「ちようどいいわ、木下。店を閉めたら久保もここに呼んで！ 大
事な話があるのよ！」

「……………」

「ムツツリーニ？ どうしたの？」

「…………… 何でもなし。盗聴機にノイズが入っただけ」

「日常会話に盗聴って単語が出てくるのっておかしくないかな!？」

「…………… なんでもいい。早く行くぞ」

『お待たせしましたっ。ただいまから、準決勝第一試合を始めます
っ！』

「ええ。ワタシたち、ホントに待ちましたよ？」

「これでやっと吉井先輩と戦えるッスね」

待つてましたとばかりに不敵な笑みを浮かべる越冬コンビ。うーん……夏川さんのこの嫌らしい笑い方は坊主先輩そっくりだなあ……。

「君たち、いくら後輩だからって僕は手加減はしないからね?」

「……………(こくり)」

「それはこちらのセリフですよ」

「さっきのことと勝負は関係ないツスからね?」

お互いににらみあう僕ら。ひょっとしたらこの戦いは今まで以上に厳しいものかもしれない。

『対戦科目は物理・生物! 両者召喚してください!』

「「「試獣召喚!!」」」

『Fクラス 吉井明久

&Cクラス 土屋康太

物理 105点

生物 197点』

「ムツッリーニ、また点数が上がったね?」

「……………一般教養」

さて。越冬コンビの得点は、

『Aクラス 常村越美

&Aクラス 夏川冬美

物理 425点&411点』

「やっぱりね。先輩たちと同じ理系か」

「ふふっ、大丈夫ですか？　これだけ点差があれば、吉井先輩なんか一発ですよ」

「アタシら前言撤回する気なんてさらさらないッスからね？」

二人のいうとおり、正直、この点差は操作技術で乗りきるにはギリギリ厳しい。ムツツリー二の点数なら、上手く言って相討ちだろう。

『（……………！）』

「ん？　今なにか聞こえたような？」

『あ、あれっ？　おかしいな？』

突然スピーカーからそんな声が聞こえてきた。この声は——
新野さん？

『た、大変申し訳ないのですが……………システムになんらかの異常があった模様で、【物理・生物フィールド】が展開しにくくなっております。緊急措置として、【化学・地学フィールド】で試合を続行いたします』

「「な、なんですって!?!」」

越冬コンビがしこたま驚いている。そりゃそうだ。確実に勝てる科目が使えなくなっただけだから。

『Fクラス　吉井明久
& Cクラス　土屋康太』

化学 92点
地学 138点

Aクラス 常村越美
& Aクラス 夏川冬美
化学 132点&161点』

うん。これなら戦える。

「畜生つ、何が起こったんスカ!？」

「せつかく勝てると思ったのに——ッ!!」

「うん？ なぜフィールドが出ないんだ？ 吉井君が有利ならいいんだけど」

「それでバカなお兄ちゃん、勝てるですかね？」

「勝てますよつ。葉月お嬢様が美春の膝の上でくつろいでくださるならっ」

「こら美春。へんなこと教えないの。それにしても、本当になんで出ないの？ またシステムの故障かしら？」

「いや……出ないのではない。『出せない』のじゃ」

「木下？ なにか知ってるの？」

「うむっ……。あの感じは、まず間違いなく——『干渉』じゃ」

問三十五（干渉）（後書き）

【久保良光企画・募集方法変更のお知らせ】

どうもアイデアの集まりが著しくないので、ちよつと募集方法を変えます。

【決定次項】

- 1、久保利光の弟
- 2、兄の同性愛は知っている
- 3、二年生

【考えてほしいこと】

- 1、所属クラス
- 2、学力（得意科目・苦手科目・総合点）
- 3、ビジュアル
- 4、性格
- 5、特徴
- 6、性癖

この項目を書いて感想またはメッセージお願いします。

問三十六（独壇）

「やあっ！！」

常村さんの召喚獣は自棄になって突撃してくるけど、操作に慣れていない二年生の攻撃なら避けるのは造作もないことだ。

「ああもうつ！　なんで当たらないのよっ！？」

『点数では負けていても経験の差では勝つ！　これが三年生の、去年王者の実力なのかつ！』

「おい実況っ、うるさいッス！　さっきの異常さえなきや楽勝なのにつ！」

「……………余所見禁物」

「えっ？　き、きやつ」

夏川さんは実況に気をとられている隙にムツッリー二に接近を許してしまった。あのどこかそっかしいところも坊主先輩そっくりだな……………やれやれ。

「ストップだムツッリー二っ！！」

「……………！？（ビタッ）」

僕の声を聞いて攻撃の手を止めたムツッリー二は、召喚獣を一旦手元に退かせた。

『土屋君の召喚獣が夏川さんの召喚獣を攻撃せずに下がってしまった！？ 一体吉井君は何を考えているんでしょうかっ！？』

「本当に……何を考えているんですか？ 吉井先輩、手加減はしないって言いましたよね？」

「アタシらが物理で戦えないからってわざと攻撃しないっていうなら……軽蔑するッスよ？」

向こうも攻撃の手を止めてこっちに注目している。

「常村さん、夏川さん。僕は手加減なんかする気はさらさらないよ」「ならどうしてさっき止めを刺させなかったんスか？」

「君たちは本来の対戦科目の物理で戦えないでしょ？ 多分、さっきのままで戦ってたら簡単に負けちゃったと思う」

「だから、手を抜いて戦ってやるってことですか？ ……軽蔑しました」

「違う！！」

『……吉井君は何をするつもりなのでしょう？』

「このまま勝っても、僕は納得出来ない！ だから今から君たちを全力で倒す！——『僕一人』で」

「えっ？」

『吉井君、それは、一体……？』

「二人まとめて相手してやるっ！ 全力でかかってこい！！」
「……………明久らしい」

ムツツリー二の召喚獣がフィールドの隅に寄った。これは戦闘に参加しないという意味表示のようだ。

「ありがとうムツツリー二。我が儘に付き合わせちゃってゴメンねっ」

「……………勝てば文句はない」

『よ、吉井選手はなんと！一人でAクラス二人を相手に勝利宣言ですっ』

『『『うおおっ！！』』』

な、なんか思いの外盛り上がっちゃった……………そういう風に受け取られるとやりにくいなあ…………。

「吉井先輩。アンタさうとうバカッスね」

「でも、そんなバカな人は嫌いじゃないです」

『試合再開っ！』

「「やあっ！」」

二人は左右に別れてのコンビネーション攻撃。一体を相手にするのには有効な攻撃だ。でも、

「経験を舐めるなっ！」

「えっ？ わっ！？」

「越美っ！ 避けて！」

二体が同時攻撃するために接近したときのコンビネーションは、お互いを傷つけないように戦わなくてはならないため、二年生には

難しい。軽く足払いをかければコンビネーションはグダグダだ。

『Aクラス 常村越美
& Aクラス 夏川冬美
化学 101点&104点』

「越美！ 時間差で攻めるッスよ！」
「わかったわ！」

そう、同時がダメなら時間差で攻める。それは上等な手段だけど、
「かかったね！」

その実体は一体ずつの攻撃。それなら僕の操作技術で処理すれば
なんの問題もない。

「せいっ！」
「ぐっ」

『Aクラス 夏川冬美
化学 75点』

さて、こうなると相手の出方も読めてくる。コンビネーション同
時攻撃、時間差攻撃ときたら次は大体、

「冬美！ もうとにかく両側から行くわよっ！」
「り、了解っ！」

挟み撃ちだ。

「いくら先輩でも、両側から攻められたら対処出来ませんよね」
「フィードバックで気絶しないで下さいッスよ——いけっ!!」

フィールドの両端に別れた二人の召喚獣が、全速力で僕の召喚獣に突撃してくる——けど、

「やっ!」

「きゃっっ!?!」

点数の高い常村さんがわずかに先に接近する。すかさずそれに一撃叩き込む。

『Aクラス 常村越美

化学 0点』

「もらったあつ! 吉井先輩っ、かく」

「よっ」

「じ……?」

振り返り様に夏川さんの召喚獣にも一発お見舞いする。

『Aクラス 夏川冬美

化学 0点』

『勝者、吉井明久君!』

うーん……ホントに勝っちゃった。

「高橋先生。ここにいらしたんですか」

「ああ、西村先生」

「意外ですね。高橋先生はこういった催しには興味がないのかと思っ
ていましたが……」

「教師として、生徒の成長を観る義務がありますから」

「なるほど、高橋先生らしいですね」

「当然のことです」

「……高橋先生、少し聞いてもいいですか？」

「为什么呢？」

「さっきの吉井の戦いぶり、どうお考えですか？」

「……もし私が吉井君と同じ点数で勝負した場合、勝つのはどちら
か、とお聞きしたいのですか？」

「察しがよくて助かります」

「……自信を持って『勝てる』とは言えません」

「……これは、教師として生徒の成長を喜んでいいのでしょうか？」
「それもわかりません」

「あ、美波たち！ 観に来てくれたんだ？」

「アキ、おめでとつを言う前にしなきゃいけないことがあるの。悪
いけど待ってて」

「???」

「お願い、事情を話して。——土屋」

問三十七（虚像）

「事情を話して……ってムツツリーニ？　一体何があつたのさ？」

美波や秀吉の空気がいつもと違う。久保君たちもいるということ
は、店を閉めて来たんだろうか。

「そうか、アキは何も知らないもんね。アキ、落ち着いて聞いて？
土屋はね、根本と手を組んでいるの。しかもそれは脅しに近いも
のらしいのよ」

「はいっ？」

「……………っ！」

ムツツリーニが、根本君と？　しかも脅されているって…………？

「おお、明久。よく勝ったな——って、何事だ？」

「あ、雄二！　いや、なんかよく分からないんだけど…………」

「ワシも信じられんのじゃが…………」

「美春が盗聴機で偶然聞いたのですっ。根本恭二とアナタとのDク
ラス戦後の会話を！」

「土屋君。何で脅されているかは知らないが、根本君の言いなりに
はならないほうがいい」

「……………俺は脅されてなんかいない（フルフル）」

「おい、ちよつと待てよ！　話が全然わからねえぞ！？」

「島田よ、雄二の言う通りじゃ。一旦二人には説明をせねばならん」

「そうね…………。じゃあ、簡単に説明するわよ」

「——ということなの」

「成る程な。それでムツツリーニが根本の野郎に脅されていると」

「ええ」

「……………っ！（ブンブンッ）」

美波は自信タツプリに頷いた。清水さんと久保君も同様だ。……

でも、残念だけどその読みは、

「残念だが、その読みは外れだろうな」

「「えっ？」」

ありや、雄二に先を越されちゃったよ。

「やつぱりお主らもそう思うか」

「ああ。ムツツリーニに脅迫されるようなネタなんてあるはずはないし、あつたとしても根本ごときに脅されているとは思えねえ」

僕だつたら女装写真とかいろいろネタはあるけど、ムツツリーニはそんなもの存在すらさせない。

「じ、じゃああの会話はなんだつたのよ！？　しっかり根本と会話してたわよ！」

「島田、冷静になって考えろ。なんでDクラス戦後の会話が今日聴けるんだ？」

「あつ……………」

っていうことは、その盗聴した会話は、

「『誰か』が意図的に録音して盗聴されるように流したんだろうな。

根本に脅されていることをムツツリー二や清水を通じて外部に知らせたくて」

と、なると脅されている人はまだ存在するということだ。

「そして根本はその相手を『ムツツリー二』と呼んだ。これは第三者に会話を傍受されたとき、脅迫相手の正体を知らせないためと、『ムツツリー二』という単語を使うことでこっち側に不穏な空気を漂わせるためだ。事実、ここに約三人がかかってるしな」

美波たちが気まずそうに顔を背けた。

「雄二よ。その『誰か』とは、誰じゃ？」

「大体絞れてくるだろ？ 根本と何らかの形で繋がっていて、なおかつ脅されるネタがありそうなプライドが高い人間と言ったら――」

『準決勝第二試合勝者！』

根本・木下ペアッ！』

「――木下優子だ」

「さて、ここらへんで……」

「「待ちやがれっ！！」」

「！？」

雄二と一緒に観客席に向かって叫ぶと、案の定見知った顔がちっちゃく埋まってた。

「ここに居たんですか、学園長」

「ロンドンは嘘だったんですね」

「……いつから気づいていたんだい？」

「明久の準決勝です。物理・生物フィールドが展開されなかったのは、アンタが改良した白金の腕輪のせいだろう？ 他の教師はともかく、明久を勝たせて得するものなんかない」

「……全部お見とおしい。わかった。全部を話すよ」

「ただいま、姉さん」

「おかえりなさい、アキ君。お祭りは楽しかったですか？」

「うんっ。お店も順調だったし、召喚大会は明日決勝で戦うことになったんだよっ！」

「そうですね。それならお祝いをしましょうか」

「へえ？ 姉さんがお祝いだなんて珍しいね？ 一体どんなお祝い

？ ケーキでも買って食べちゃう？」

「今夜は一緒に寝てあげます」

「ごめん姉さん。頭ごなしに否定はしないけど『今夜は』って表現は止めてくれないかな？ それだと姉さんはたまにしか僕と一緒に寝ようとしなくてことになるよね？」

「あら、アキ君は毎日姉さんと寝たいのですか？ いやらしいですね」

「違うからね！？ いやらしいのは姉さんだよ！」

「実の弟にいやらしいなんて……」

「ごめんなさい」

「……ムラムラしますね」

「変態だっ！」

「おふざけはそこまでですよアキ君。早くご飯を食べて休みましょ

「う」

「……姉さんには日本語のリハビリが必要だと理解したよ……」

問三十八（次日）

「アキ、おはよ」

「おはようなのじゃ、明久」

「あ、二人とも。おはよう」

学園祭二日目の朝。美波と秀吉が揃って登校してきた。

「それで秀吉。根本君に脅されているのは木下さんで間違いなかった？」

「うむ。それとなく根本のことを話題に出したら、表に出さぬように動揺しておった。何かを隠しておるのは明白じゃ」

こういうとき、秀吉が演劇の達人で良かったと思う。本人は軽く言ってるけど、その洞察力は並大抵のものではないだろう。

「して明久よ。召喚大会のほうはどうなのじゃ？」

「うん。対戦科目は社会科らしいから、得意科目で勝負できるみたいだよ」

「うん、それなら安心ね。せいぜい頑張ってお店の宣伝に貢献してよ？」

美波が悪戯つぽい笑みを浮かべた。こういう美波の顔は……嫌いじゃなかったりする。どれ、皮肉には皮肉で返すとするかな。

「あははっ。頑張って席が足らなくなるくらいお客さんを連れてく

るから、せいぜい頑張つて切り盛りしてくれたまえぐぼっしやあつっ！？」

何！？ 今背中から会心の一撃が飛んで来なかった！？ いや、敵だから痛恨の一撃のほうが正しいのかな！？

「何を勝手なことを言ってるんですかつ。責任者が居ない中で切り盛りしてるのは紛れもなくお姉様なのですつ。ブタ野郎も少しはお姉様に感謝しなさいっ！」

「し、清水さん！ そこは本音と建前という日本の文化を踏まえて下さい！」

朝からバイオレンスな光景が飛び交う学校ってなかなか無いんじゃないだろうか。

「清水さん、止めるんだ。吉井君はお店のことを考えて行動してくれているんだよ」

「く、久保君」

「お店のため？ このブタ野郎が何をしたっていうのですかつ？」

「いいかい、吉井君は今朝早くから来て今日の分のクレープを三百食分作っていたんだ。きっちり厨房チーフの役割を果たしているんだ。責める要素はない」

うわっ……久保君。フォローは有り難いんだけど、それは恥ずかしいから出来たら皆の前では言わないで欲しかったよ……。

「……アキ」

「は、はい！」

ヤバいつ。こういう時の美波は大体怒って、

「無理しないでね？」

「大変申し訳あります——え？ あ……うん」

そこには心配そうにしながらも、頼りがいのある美波の顔があった。

「とにかく、アキは召喚大会に集中して？ お店のことは気にしないでいいからっ」

「は、はい……」

えっと……なんていうか拍子抜けだ。いつもなら「勝手に行動するな」って攻撃してくるのに。……でもさっきの美波の顔、いつもと違った雰囲気でかわいか——

「あー、うむ。ところで明久よ。学園長のところにはいかんで良いのか？」

「え？ あ、そうだ。腕輪を貰いに行かなきゃいけないんだった」

時計を観るとすでに約束の時間が訪れようとしていた。早くババアに会いに行かなきゃっ。

「それじゃ、お店のほうは頼んだよっ」

返事も待たずに扉を開けて廊下を突っ走った。幸い時間が早いためか、あまり人が居ないのでぶつかることはなかった。

「そういえば、なんで久保君は僕が朝早くから来ていたことを知ってたんだろっ？ っていうか久保君はいつから学校にいたんだろ？」

久保君っていろいろ不思議な人だなあ。

「失礼しまーす」

「だから返事を待てと言ってるだろうクソジャリ！」

「あはは、すいませーん」

いい加減このやり取りも飽きてきた。

「全く、坂本にはもう渡したよ。ほれ、同時召喚型の腕輪だよ。受けとりな」

「はい」

早速渡された腕輪を着けてみた。前のヤツとの違いはあんまり感じられない。

「それにしても、なんでまたロンドンなんて嘘をついたんですか？ ホントは学園の研究所に居たのに」

「昨日も説明しただろう？ 去年の竹原みたく、アタシの揚げ足を取って学園を転覆させようとする輩に狙われないようにするためさね」

「なら僕らまで騙す必要はなかったのに……」

「敵を騙すにはまず味方から、というだろう？」

このババア。さては全然反省してないな？

「あれ？ 竹原先生が辞めた後の教頭って誰がやってるんですか？」
「なんだ、そんなことも知らなかったのかい？ 今の教頭は、」

コンコンッ。

ん？ 誰がお客さんかな？

『学園長。来賓の方が挨拶にお見えです』

ドア越しに初老の男性の声が聞こえた。迂闊に入ってこない辺り、礼儀正しさが伺える。

「ああ、今いくよ」

『失礼しました』

そう言うや否や、足音は遠くへと去って行った。

「今の声の先生だよ。お前さんも知ってただろう？」

あ、なるほど。今の人が。もちろん、

「知りません」

「アンタは去年の担任すら覚えてられないのかい！？」

いや、僕の記憶に間違いが無ければ担任はずっと鉄人だったと思う。

『君の記憶が間違っています』

問三十八（次日）（後書き）

『私が誰がわかったら感想を下さい』

問三十九（映画）（前書き）

『正解は福原慎でした』

問三十九（映画）

「さて、腕輪も貰ったしお店の手伝いでもするかな。まだ決勝まで時間あるし」

決勝はお昼の一時に行われる。ムツツリー二と落ち合う時間も考えると、まだ四時間弱くらい時間が余ってしまった。

「おーい、みんな。ただいまっ」

「お帰りなのじゃ明久。ずいぶんと早かったのう？」

「うん、なんのトラブルもなかったからね」

「普通は学園長室でトラブルが起ることが珍しいのじゃが……」

トラブルが起きるときは大体雄二が絡むときだったりする。僕は至って巻き込まれる側の人間だからね。

「それはそうと、まだお客さん少ないね。朝早いからかな？」

さすがにどんな甘いもの好きでも、朝から出店でクレープを食べる人間は少ないだろう。現に今いるお客さんは一人だけだけど、コーヒーで済ましている。

「うむ。せっかく明久が作ってくれたクレープもまだ出せぬのじゃ」

「ひ、秀吉。ちょっと恥ずかしいからそのことは触れないでほしいんだけど？」

「む？ 明久、なにゆえワシから目を逸らすのじゃ？」

秀吉が僕の前に回り込んで覗き込んでくると、身長差のせいで自然と上目遣いになってしまふ。こっ、これはかわいいっ。小悪魔的だっ！

「木下君。お客様の前で無礼なことではいけないよ。君はもう少し吉井君と距離を取るべきだと思っ」

「そうだ吉井！ もっと木下から離れやがれっ！」

久保君の言うことは最もかもしれないけど、朝からモヒカン先輩に絡まれるのはちよっとした拷問だ。

「といひかなぜこの先輩しか客がおらんのじゃ……？」

ちよつと、いやかなり秀吉が不憫だ。

「あ、そうだ秀吉。ムツツリーニからCクラスでやつてる映画のチケットを二人分もらっただけど、暇なうちに一緒に」

「それを寄越しなさい吉井明久っ！ お疲れのお姉様を癒しの空間へお連れするのは美春の役目なのですっ」

「といひか清水よ。お主今どこから出てきたのじゃ？」

清水さんの足下は擦り焦げた靴のラバーの匂いで充満していた。高速で移動した証拠だろう。

「そんなことは問題ではありませんっ。今論すべき問題は、映画館の暗闇の中でお姉様にどのような性的接触を謀るかですっ」

なんだろう。今議論に必要なステップが何段もスルーされた気がする。

「待つんだ清水さん。映画館なら隣の席の人に気づかれてしまうよ。接触するならもっと適した場所を選んだ方がいい」

「久保君！ 突っ込むところはそこなの！？」

久保君も最近Fクラスに毒されている気がする。

「ふふっ、甘いですね久保利光」

「甘い？ 何が甘いと言うのじゃ？」

自信たっぷりと言わんばかりに清水さんが持論を展開する。

「気づかれてしまうかもしれないというスリルが興奮を引き立てるのですっ」

とても朝の九時の会話とは思えない。

「おい吉井！ そのチケット寄越しやがれ！ 俺が木下を誘うんだ！」

「い、いやじゃ！」

おお。高校の学園祭で大学生が泣くというシニールな光景が目の前に広がった。

「寄越しなさい吉井明久っ。美春がお姉様を誘いますっ」

「吉井君逃げるんだ！ あとで僕と観に行こう！」

「いや、最初に誘われたのはワシじゃからワシが行くのじゃ！」

「ねえなんの騒ぎ——ってなに！？ 朝から店を汚すんじゃないわよっ！」

なんだか落ち着いて手伝える雰囲気じゃないなあ……。これ以上巻き込まれるのは嫌だから一人で観に行こう……。

3 - C にて。

「何名サマでスカ？」

「えっと、三人で」

「サミしいデスネ」

「ん？ あの片言の外国人……どっかで見たような……？」

受付から入ると場内は既に暗く、隣の人の顔が見えなくなっていた。ここまで暗くする必要はあったのかな？

『それでは、これより映画を上映いたします』

まあいいや。ゆっくり映画を観て時間を潰そうと。

『……やっぱりか。確認させてもらっぞ。（ペロッ）これは――

痺れ薬か』

……やっぱりつまらない。

「シンジ……」

隣の人はかなり熱心に観ているようだ。その人はこの学校の制服を着ていて女子のようだけど。

暗闇にある程度慣れたのか、ぼんやりと顔が認識出来た。茶髪でショートカットで顔が秀吉に似てるなあ――

「……って、木下さん？」「え？……よ、吉井君！？」

問四十（決勝）

「あ、ムツツリーニ！ 秀吉も来てくれたの？」

「うむ、明久たちの試合をビデオに収めてくるよう言われたのじゃ」

「……………明久、遅い」

「ごめんね。ちょっと面白いこと聞いちゃってさ」

「……………？」

「それより、秀吉が来てるならちようどよかった。二人に頼みたいことがあるんだけど」

「「????」」

「流石は決勝戦だね」

「……………豪華」

会場は昨日までの舞台を一新して豪華なものに変わっていた。やっぱりこういうところにお金をかけるべきだね。

「吉井君と土屋君。入場が始まりますので急いでください」

僕らの姿を見つけた係員の先生が手招きをしている。こうして係員を配置してるってことは、やっぱり扱いが違みたいだ。

『さて皆様。長らくお待ち致しました！ これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

聞こえてくるアナウンスはこれまで通り新野さんのものだった。

「あれ？ 去年はプロの人を雇ってなかった？」

「…………… 去年の人は服役中らしい」

服役中？ なにか事件でも起こしちゃったのかな？

「…………… 俺たちが女装した『ミス浴衣コンテスト』の司会者」

とてつもない罪悪感で押し潰されそうだ。

『出場選手の入場です！』

「どうしたんですか吉井君。さ、入場してください」

先生にボンと背中を叩かれる。ちょっとテンションは下がったけど、いまは試合に集中するべきだ。

「じゃ、ムッツリーニ」

「…………… (グッ！)」

『三年Cクラス代表・土屋康太君と、同じくFクラス代表、そして去年の優勝者、吉井明久君です！ 皆様拍手でお迎え下さい！』

割れんばかりの拍手が僕らをつつんだ。拍手の量でいったら去年の比ではない。

『そして対する選手は、三年Aクラス・木下優子さんと、同じくAクラス・根本恭二君です！』

二人がコールを受けて姿を表した。

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とはテストの点数に比例した――』

アナウンスで説明が入るけど僕らは聞くまでもなく理解していることだ。

「根本君」

「ん？　なんだ吉井」

「君は、木下さんを脅しているね？」

根本君の眉がピクツと動いた。

「……誰から聞いた？」

「さっき、本人から」

「なるほど……」

根本君が隣の人物を見ながら顎に手を当ててなにやら考え事をしている。

「この学園のPVが去年作成されたことは知ってるよな？　そのPVに木下が起用されているんだが、実は校歌斉唱のシーンは木下秀吉と替え玉したらしい。俺はそれをネタに脅迫してるんだよ」

「それも聞いた」

「それならなんだ？　お前らには関係ないだろ？」

「関係あるさ」

凜とした態度ではつきりと反論する。

「関係ある、木下さんが困ってるんだから」

「……お前の考えることはよくわかんねえな」

『それでは試合に入りましょう！ 選手の皆さん、どうぞ！』

「……試獣召喚」……

呼び出すと同時に、ディスプレイに僕らの点数が表示される。

『Aクラス 木下優子

& Aクラス 根本恭二

日本史 360点

& 世界史 211点

VS

Cクラス 土屋康太

& Fクラス 吉井明久

地理 182点

世界史 180点』

『試合開始っ！』

「行くよっ、ムッツリーニ！」

「……………任せろ」

僕は根本君に向かって召喚獣を突っ込ませた。点数がそれほど離れていないなら、戦闘慣れしている僕に分がある。だけど、

「どうした？　なぜまともに攻めてこない！？」

僕は攻撃は極力抑えていた。根本君の攻撃を操作技術で流れるように避けていく。端から見れば拮抗しているように感じるだろう。

「吉井、さてはなにか企んでるな？」

「さあ？　そっちが何も言わない限り、僕は何も教えないよっ」

あえて急所を外し、少しずつダメージを与えていく。これで大体同じ点数になった。

「じ、じゃあ教えてやる。そのPVがこのあと表彰式で流されるんだが、俺がハッキングして滅茶苦茶な映像にすり替えた。大人しく負ければ、もとのPVを流してやろうじゃないか」

次々と自分から種明かしをしていく。これが小悪党と言われる由縁なのだろう。

「返事は？」

「決まってる。ノーだよ」

「……お前、どんだけバカなんだよ？」

僕の返答を聞いて根本君が呆れたのと同時に、

「……………明久、出来た」

「その言葉を待ってたんだよっ！」

完全に勝つための準備が整った。

「じゃあ僕も教えてあげるね。試召戦争のルールをよく考えてみな

よ、Aクラスの根本君？」

問四十一（表彰）

「ふんっ、何をほざいてやがるんだ？ 試召戦争のルールならさんざん頭に叩き込んでるっての！」

そう。一年間試召戦争に振り回されてきた僕ら三年生は完璧にルールを把握している。でも、

「新ルールについての理解はまだまだだね」
「何っ!？」

根本君があわててディスプレイや周りの状況を確認し始めた。ディスプレイの画面は点数以外に変わっているところはなく、ムツッリーニたちは根本君の背後でつばぜり合いを繰り広げていた。

「ふふっ、ハツタリか。そろそろ真っ向から向かってきてはどうだ？」

「言われなくても——二重召喚っ！」

呼び声に応じて現れた分身に指示を出す。

「かかったな吉井！ 二体の召喚獣なら点数が半分になる。こっちも二体で仕留めりゃいい！ おい木下っ、早く加勢に」

そこで根本君がハツとした。そりゃだつて、

「……どうして木下は土屋と決着をつけきれてないんだ？」

あれだけの点差があつたのに、まだ向こうは拮抗している。いくらムツツリー二が戦闘慣れしているとはいえ、召喚獣を扱ったことがある人間なら誰しも思うだろう。

「ま、まさかつ？」

再びあわててディスプレイを見つめる根本君。心なしか小刻みに震えているってことは、もう僕の罠に気づいたって事だ。その回避が出来ないことにも。

「そのまさかだよ！ ムツツリー二出番だ！」

「……………御意」

呼ばれた本人は、召喚獣を構えながら根本君の召喚獣へと飛び出るように突進した。木下さんの召喚獣の背中から飛び出て。

『Aクラス 根本恭二

世界史 0点』

『い、いったい何が起こったのでしょうか？ 土屋君の召喚獣が木下さんの召喚獣をすり抜けましたっ！』

「くっ…………『日本史と地理はリンクしていない』か」

「そうだよ。だから、ムツツリー二は木下さんの召喚獣をすり抜けられたんだ」

「さてよ。それなら土屋と木下は——」

「拮抗してるふりをしながら時間を稼いだけさっ」

初めて戦闘を見た人ならば、このルールは細かすぎて伝わらない。一回このルールを身を持って知った僕だからこそ出来ることだ。

八百長かもしれないけど、木下さんを助けるにはこれしかなかったしね。

「吉井君。これでもう大丈夫なのよね？」

「うん、これであとは木下さんが負けてくれれば――」

『ね、根本君が倒されてしまいました！ 残る木下さんは一人で三体を相手にどうするのかっ！？』

「……………」

「えっと、吉井君」

「な、なにかな？」

なんか、すごく嫌な予感……。

「このままアタシがやられたら不自然すぎるから……………ちょっと真面目になるわよ？ 悪いけど」

「あはは。そんなとこまでやる気を出さなくても大丈夫じゃげぼしやあつ！？」

三年間で一番フィードバックが理不尽に思えた。

「ふう……………なんとか勝ったよ」

「……………一苦労」

木下さんを挟み撃ちでなんとか倒して、僕らの優勝は決まった。

『ただいまから、表彰式に移ります』

「あ、ムツツリーニ。確認するけどあれは大丈夫なんだよね？」

「……………抜かりはない」

「おいクソジャリ。くつちゃべってないではやく腕輪を受けとりなよ」

「あ、はい」

意識をババアに向け直して、赤金の腕輪を受けとる。後は簡単なデモンストレーションを行うだけだ。

「あ、学園長。このあとのP.V、おかしいけど気にしないでくださいね」

「ああ。木下から全て聞いてるよ」

ババアの言葉を尻目に、壇上から降りる僕たち。

『それでは、学園紹介のプロモーションビデオをご覧ください』

巨大なディスプレイにプロモーションビデオが流れ始めた。沿革がなんやら難しくてわかんないけど。

「吉井、よくもやってくれたな」

「ん？ ああ、根本君」

「さっきの試合の時間稼ぎ。あれは木下が学園長に話をつけに行くためのものだったのか」

「うん。『P.Vが狙われるから、管理をちゃんとしてくれ』って」

「お陰でセキュリティが厳しくて入れなかった」

「あはは。それなら僕の勝ちだね」

ちよつと勝ち誇ったように胸を反らせてみる。

「いや、まだ方法はある。木下優子には痛い目を見てもらわにやすまない」

そう言つて根本君が取り出したのは——マイク？

『皆さんよく聞いてください！』

根本君はマイクを使ってそんなことを言つた。突然の声に観客は驚いていた。PVはちょうど入れ替わつた秀吉が校歌を歌っているシーンだ。

『そのPVに出ているのは、木下優子ではなく——木下秀吉なのです！』

そんな衝撃の事実を聞いた観客の反応は、

『『うん。そうみたいだね』』

冷たかつた。

「ど、どうしてだよ？ 入れ替わりだぞ？ 問題視しろよ！」
「根本君。違うんだ。よく見てよ」

僕がディスプレイを指差すと、その先にあつたのは、

『出演・木下優子・木下秀吉』

そんなクレジット。

「は……？」

「簡単だよ。出演のクレジットをムツツリーニが書き換えただけさ。始めから双子でPVに出てたってすれば外見は同じだしね」

「くそっ……！」

捨て台詞を残して根本君は去っていった。

「む？ このままじゃとワシは女子の制服を着てPVに出たことになるような気がするのじゃが……？」

問四十二（呼出）

デモンストレーションを終えて表彰式が閉会したあと、僕とムツツリーニはそれぞれのクラスに急いで戻った。

「僕の優勝のお陰でお客が増えてるといいんだけどな」

あつ、お店が見えてきた。誰かが迎えてくれるといいんだけど。

「ただいまっ。優勝し」

「アキっ、受け取りなさいっ！」

まさかお盆が迎えてくれるとは思わなかった。

「お祝いしてあげたいけどそれどころじゃないのよ！」

「バカなお兄ちゃんもお手伝いしてくださいですっ」

「貴方のせいでお店も美春もてんでこ舞いですっ」

「お主もはやく厨房に回ってくれ！ 落ち着いたらウェイターも頼むっ」

「吉井君。終わったら盛大にお祝いしてあげるよ」

ちよつと涙が出た。

「ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各

生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった……」

「さすがに疲れたのう……」

怒濤の勢いでやってくるお客さんをさばいて案内しては料理して案内してさばいて料理して。ここまでの業務を仕切った美波に敬意を払いたい。

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

「覗くんじゃありませんよブタ野郎」

そんな無慈悲な宣告。

「えっ！？　せめて美波のウエイトレス姿は写真に収めたいのにつ
！」

「駄目ですつ。お姉様の由々しきお姿は美春だけのものですつ。美春はこのあとお姉様と更衣室でいやらしいことをするんですから！」

「待つて美春。あなたと二人で更衣室ほど危険なものはないわ」

「じゃあ葉月お嬢様も一緒にすれば問題ありませんつ」

「バカなお兄ちゃんたちさよならですつ」

おお。葉月ちゃんも美波と同じくらい足が早い。やっぱり姉妹つて似てるなあ。

「ああお嬢様っ！？　こうなったらお姉様と二人きりで保健室にいくしかないませんつ」

「どうしてその考えが出てくるのよっ！？　こうなったら木下！　アンタも一緒に着替えに来なさいっ！」

「だからワシは男じゃと言っておろうに！」

何て言うかこう……一兎をおったのに一兎も獲られなかったよ。

「しょうがないな。じゃ、久保君。僕らも着替える?」

「ああ。早く更衣室に行こう」

心なしか久保君の鼻息が荒い。

P i P i P i P i P i

ん? メールだ。誰からだろう。

【送信者 島田美波
「たすてけ」】

懐かしさと悲しさで涙が止まらなかった。

P i P i P i P i P i

ん? もう一通?

【送信者 姫路瑞希
「今から屋上に来てくれませんか? 話したいことがあります」】

「話したいこと? なんだろう」

美波を清水さんから守らなきゃいけないけど、秀吉がいるから一応は安全だろう。

「吉井君。どうかしたのかい?」

「うん。急用ができたみたい。久保君は先に着替えちゃって」

返事を待たずに校舎の屋上へと向かう。

（吉井君と更衣室なんて、千載一遇のチャンスだったのに……）

なぜか絶体絶命のピンチを脱した気がしてならない。

「ふう……やっと着いたけど……」

筋肉痛になりかけている身体を必死に動かして階段を昇ると、外の風が気持ちよかった。

「あれ？ 姫路さんはどこにいるんだろう？」

『あー……ーひーさー……ーんっ！』

「ん？ 誰か呼んだ？」

回りを見渡してみるけど、辺りに人の気配はない。空耳だろうか？

『……っちです……ーっ！』

いや、空耳じゃない。これは――

P i P i P i P i P i

「あ、着信だ」

急いで携帯を取り出して電話に出た。

『もしもし明久君ですか？』

「その声は——姫路さん？ 君はいまどこにいるのさ？」

『ふふつ。屋上ですよ』

「屋上？ それなら今僕もいるけど……」

『違います。私がいるのは新校舎の屋上です。明久君は旧校舎の屋上にいるでしょ？』

「え？」

あわてて新校舎の屋上を見るとそこでは姫路さんが大きく手を振っていた。

「ご、ごめんなさいっ！ てっきりこっちかと思って……」

『仕方ないですよ。クラスが変わって、それぞれの校舎の屋上が違ってたんですから』

「それでも確認しなかった僕が悪いよ！」

『あはは。明久君は変わりませんね』

「それって喜んでいいのかなっ！？」

『あははははっ』

姫路さんは本当に楽しそうに笑ってくれた。

『……ねえ、明久君。もう一回聞いてもいいですか？』

「？」

『私と離れて、どう思ってます？』

問四十三（告白）

「えっ……………」

『……………恥ずかしいから二回は言いませんよ』

その質問には昨日答えたはずだ。それでもまた質問してきたのなら、姫路さんはあの返事では納得出来なかったことになる。

「そ、それは寂しいけど、この学園の制度なんだから仕方ないし。っていうか去年一緒のクラスになれたことが特殊だから……………」

『はあ……………やっぱり明久君はお馬鹿さんですね』

彼女の意図がわからない。なにを求めているんだろう。

『私が聞きたいのはそんなことじゃないんです。私と離れて、純粹にどう思ってたか聞きたいんです』

姫路さんの声は真剣そのものだった。それは、今まで聞いたことがないくらいに。

『今だってこんなにも離れてるじゃないですか。気づかない間に、私たちはこんなにも離れてるじゃないですか。私は——寂しいです』

姫路さんの本心。僕も姫路さんの気持ちと一緒に。だから、

「僕も姫路さんと離れたくなかった。離れて寂しかった」

『明久君……』

「でもね、近づく方法ならあるんだよ」

『えっ……？』

「去年は姫路さんが来てくれた。だから今度は、僕が姫路さんのところに行くよ」

そう。なにも姫路さんが無理に近づいてくる必要はない。

「いつか試召戦争で、Aクラスに勝つ。そして、僕の力で姫路さんを越えて見せる。さすがに学力では勝てないけど、実力で姫路さんに近づきたいな」

『……………ふふふっ』

なにかを悟ったような姫路さんの微笑。もしかして初めてかもしれない。

『変わった宣戦布告ですね。さすがはFクラスの代表さんです』

「それは誉めてるのかな！？ 僕だってちゃんと成長してるんだよっ！？」

『はいはい。わかりましたよ。それじゃ』

そこで電話が切られた。向こうの校舎を見ると、ちょうど屋上の

入り口のドアが閉まるのが見えた。

「姫路さん……」

「何？ 瑞希がどうかしたの？」

そんな背中から聞こえてくる声。

「みつ、美波！？ いつからそこに！？」

「な、何よ。アキがボーツとしてるから声をかけただけよ！」

よかった。どうやらさっきの電話は聞かれてなかったみたいだ。聞かれていたら恥ずかしさと姫路さんに対する申し訳なさで潰れていたかもしれない。

「それより、早く行きましょ！ 後夜祭もう始まっちゃってるわよ？」

疲れを微塵も感じさせない美波の笑顔。その魅力的な雰囲気思わずじつと見つめてしまう。

「も、もう！ さっきから何よ！？ 人の顔じろじろ見て！」

「ご、ごめんなさいっ。美波がタフだから頼りがいがあるなって思ったらついまじまじと……」

ってなにを言ってるんだ僕は！ 女の子に対して頼りがいがあるなんて失礼極まりないだろ！

「た、頼りがいね……」

あれ？ 思いの外好反応なの？

「そ、そう言えばさ、アキ。Dクラスとの試召戦争のとき、『ずっと守っていてほしい』って言ってくれたじゃない？」

「う、うん」

「あれって――」

と、美波が何か言おうとしたところで。

『お姉様をたぶらかす気配……コロシマス』

邪気の発生を確認。

「み、美波！ 今こそ守って！ この僕の頸動脈をシャーペンの猛威から守ってよ！」

「美春！？ アンタまた私の邪魔をつ！」

「お姉様は美春が守りますっ。ブタ野郎はこの世から消え去りなさいっ」

夜の屋上は怒号とシャーペンの飛び交うカーニバルだった。

「む？ 明久に島田。それに清水か。悪いが先に始めておいたぞ」

「これ以上Fクラスの皆を待たせるわけにもいかなかったものでね」

「ああ、ゴメンね秀吉に久保君。ちよっと手間取っちゃって」

手間取ったのが清水さんとの格闘だなんて言えない。

「で、打ち上げは去年と同じ近所の公園ね。悪くないんじゃない？」

既に須川君たちFクラスメンバーも揃っていて、残るは僕たちだけだった。僕と美波は近くにあったベンチに座った。

「美春はお姉様と一緒にならどこでもかまわないですっ」

「まあよい。お主らも乾杯するのじゃ」

お盆に乗せたジュースを僕らに渡してくれる秀吉。やっぱり女の子ってこういう気遣いがすごいよね。

「美春はお姉様の為にお菓子を買ってきますっ」

「清水さん。僕も同行するよ」

そう言つて久保君たちは近くのコンビニへと向かつて行った。

「……心配じゃ。様子を見てくるかのう」

秀吉もそれに続く。なにを心配しているんだろう、久保君がいるから変なものは買わないと思うんだけど。

「ふう……疲れたわね」

「うん……美波には迷惑かけちゃったしね。後でお礼をしなきゃ――」

コテンッ。

「――つて美波？」

横を見ると、そこには僕の肩に頭を乗せて眠る美波の顔があった。やっぱり表に出さないだけで、相当疲れていたんだろ。強がりな美波らしい。

でもこのままじゃマズい。何がマズいって、僕の心拍数とか理性とかが。

「アキい……むにゃむにゃ……」

こ、こんな美波は見たことないっ。なんだこの可愛らしさ！？
ヤバい。こんなの、僕の知ってる美波じゃな――

「いたーっス！！」

「へ？」

公園の入り口で絶叫しているのは――夏川さん？ 横には常村さんもいる。ってなんで夏川さんはダッシュでこっちに向かってくるの！？

「吉井先輩！！ アタシの話を聞いて下さいっス！」

夏川さんは僕の目の前でピタッと止まって言った。美波が寝ていることは気にならないらしい。少し遅れて、常村さんもやって来た。晴れ晴れとした夏川さんに比べてなんだか苦い顔をしてるけど。

「吉井先輩―― いや、師匠！ アタシを師匠の弟子にしてくださいっス！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5210x/>

バカと新学年と受験戦争

2011年11月21日05時17分発行